
汚れなき邪悪な心

神崎 ゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

汚れなき邪悪な心

【Nコード】

N9964A

【作者名】

神崎 ゆう

【あらすじ】

『悪』とは何か……。それが今回のテーマ。作者の考え得る『究極の悪』。その姿を、貴方は目撃する……。！

序

人は、様々理由で、他人の命を奪う。恨み、嫉み、恐れ、憎悪、渴望、正義感……。それらの人を突き動かす負の感情があるからこそ、第三者は犯罪者を醜いと思う。

金が欲しかった、腹が立ったなど、犯罪者の動機を聞いて初めて人々は犯罪者を『悪』と認識する。負の感情の醜さこそが、『悪』の本質と言える。

では仮に、犯行の動機が……。その行為に及んだ理由がなければ、どうなるのか。

感情の器をコップとするならば、動機は中の水。人はコップの中身から、コップそのものの質を判断する。動機なき犯罪は、中身のないコップと同じである。

判断する材料がないとき、人は犯罪者をどう見るのか……。『悪』と断定できないとき、人はどうやって人を裁くのか。

今、動機なき悪の出現に、世の中が揺れる。

広い会議室で、警視庁の重鎮達が一堂に会していた。長く続く沈黙により、会議室には重苦しい雰囲気漂っている。

その逃げたくなるような状態が続いているのには、理由があった。

「……本日、皆に集まってもらったのは他でもない」

会議室の最も奥の席に座る男が、ようやく口を開く。

この場に全員が集まってから、実に十五分が経過していた。

「もう既に伝わっているとは思いますが、我が国最大の囚人数を誇る、東京レクイエム刑務所から、ある死刑囚が脱獄した」

最大であると同時に、最高峰の技術の結晶でもあるそこには、全国の囚人の内、約35%が服役している。勿論、これまでの間に何人も囚人達が、そこからの脱獄を試みた。

しかし、最高峰の技術の力と、数百にも及ぶ警備員達の連携によって、その試みが成功することはなかった。

鉄壁の牢獄と謳われた、レクイエム刑務所……。ついに、そこからの脱獄を成功させてしまった。しかも、その脱獄者が、ただの犯罪者ではなかった。

「とんでもないことになりましたな……。まさか奴が、再び外へ出てしまうとは」

「奴の危険度は尋常ではありません。総監、直ちに対策を……！」
重鎮達は、先程脱獄のことを報告した男に目を向ける。

警視総監……。それが、この男の立場である。

「無論だ。その対策実行を伝えるために、皆を集合させた」

総監は冷静だった。対策の実行……。それを聞いた途端、会議室が騒々し始める。

既に対策は練ったということ。それは重鎮達に、総監の有能さを再認識させた。

「さすがは総監。既に考えをおもちとは。して、対策の内容とは？」
重鎮が問うと同時に、会議室の扉が叩かれた。

「目には目を。犯罪の天才には、捜査の天才を。紹介しよう。今回、対策の要となる……」

扉が開く。そのドアノブを回した者の姿に、重鎮達はただ、驚くしかなかった。

第一章 疑惑ノ薫リ1

少し前に、とある記事が、世間を騒がせた。

『前代未聞！未成年凶悪殺人犯に死刑判決！』と言う見出しが、新聞の一面を飾った。

記事の詳しい内容は、こうである。

日本中を恐怖に包み込んだ連続通り魔事件の真相が、昨日未明明らかになった。驚くべきことに、犯人は十五歳の少女だった。数十名の命が犠牲となったこの事件、検察側は今までに類を見ない、未成年の起こした事件に起訴する意向を示している。

「犯行者の思考は危険極まりなく、更正の余地もない。未成年とは言え、法によって罪の重さを測るべきである」

と警視庁総監、神崎正義しんさき まさよし氏は語っている。

そして数カ月後、新たな記事が一面を飾る。

『十四歳の通り魔に死刑判決！』

この報道に、世間は揺れた。日本国憲法が定まってから、初めて未成年に法的罰・・・しかも死刑が執行される。

その判決によって、通り魔事件は幕を閉じたかに見えた。

・・・。

少年がいる。少し癖のある黒髪で、学生服に、手には小さな鞆を持っている。

少年は今、自身の通う高等学校に登校するところである。そのため、周りには学生服を着ている少年少女がたくさん歩いている。しかし、少年に声をかける者はいない。

誰もが少年に話し掛ける事無く、学校の正門へ向かっている。

少年は非社交的だった。

寡黙で、他人との関わりを持ちたがらず、クラスの中でもずっと黙っている。入学当初は、彼を気遣って軽く話し掛ける者もいた。しかし、ことごとく玉碎し、今では皆諦めてしまっている。

少年もその事をわかつているが、正直、どうでもいいと思っている。

下らない連中がどう思おうが、関係ない。人付き合いは必要最低限、関われると思った者だけで、関わってはいけない。友達がないわけではないのだから……。

「よう、神崎！」

後ろから走ってきた茶髪の少年が、黒髪の少年の背中を叩いた。

「今日も目付き悪いな。ちゃんと寝てるか？」

「……余計なお世話だ」

黒髪の少年「神崎達也しんざき たつや」は、無愛想に答える。茶髪の少年は、それにもう慣れていた。

その適応能力が、達也との友情に繋がっているのだ。

「にしても、お前の親父って意外と渋いな。どんな人なのかと思ったら」

達也の父……つまりは警視庁総監、神崎正義。未成年の通り魔に、死刑が確定した際に、マスコミのインタビューを受けていた。それが放映され、学校中に達也の父の職が知れ渡ってしまった。

達也はその事を黙っていた。只でさえよく思われていない状態でそんな事が知れたら、さらに面倒なことになってしまうからだ。

「……」

「ま、まあいいじゃんか。そう言う奴らは勝手にさせておけば」
勿論そのつもりである。しかし、連中の行動が度を超さないとも限らない。警戒するべきだな。

「それよか、今日オレらのクラスに、転校生が来るらしいぜ」
達也の雰囲気になれたのか、茶髪の少年「倉坂栄司くらさか えいじ」が話題を変える。

「転校生・・・？」

別に興味はなかったが、スルーするわけにもいかない。とりあえず話を聞くことにする。

今転校生とは・・・季節外れだな。

「何でも、二人来るらしい。妙だと思わないか？今の時期に、しかも二人なんて」

さつさと考えを述べず、栄司は黙った。どうやら、聞いてほしいらしい。

このまま放っておいてもいいが、さすがにそれは可哀想だろう。達也は調子を合わせることにした。

「・・・何が妙なんだ？」

栄司は待つてましたとでも言うように、懷から紙の束を取り出した。新聞のようだ。

ガサガサと音をたてながら、栄司は小さくたたんだ新聞を開く。

「お前は新聞取ってないから知らないだろ。ほら、これ」

栄司がある記事を指さした。それは一面を飾っており、でかい黒字が、もともと白かった紙に並んでいた。

『恐怖再び！未成年死刑囚脱走！』

「・・・！」

それは、世にも恐ろしい記事だった。

数十人と通りすがりを殺したとして、数カ月前に、未成年にして死刑判決を受けた者が、刑務所から脱走したと言うのだ。

「この記事に載ってる奴な、近くにあるレクイエム刑務所から脱走したらしいんだ。こいつの年令とタイミングからして・・・」

「この脱走犯が、転校生だって言いたいわけだな？」

達也は先を読んでいった。話の流れからして、先読みはさして難しくなかっただろう。

刑務所から脱走した死刑囚が、この学校に転向してくる・・・。栄司も妙な仮説を立てたものである。

「ありえない話じゃないと思うぜ。身を隠しやすいし、いざとなっ

たらクラスメイトを人質に取ればいい。絶好の場所だ」

彼の言う事も一理ある。さらに付け加えるなら、達也達を含む一般人は、脱走犯の顔を知らない。

中途半端に少年法が適応され、犯人の顔が公表されなかったのだ。そう言ったことも含めて、一般に紛れるには、都合のいい場所だろう。

「・・・とりあえず、様子を見るか」

「どんな野郎か、顔を拝ませてもらおうじゃねえか」

二人は忘れていた。その脱走犯が、『野郎』ではないことを。

ホームルームが始まる3分前。教室はいつものようにざわざわし、そしていつものように、達也は黙って席に座っていた。

窓の外を眺めつつ、時間が過ぎるのを待つ。

転校生が姿を見せるのは、ホームルームが始まってからだだろう。

それまでの時間を、達也は外を見ると言う、非社交的極まりない方法で過ごしている。

別に外で何かが起きているわけではない。家の屋根が並び、この誰かもわからないサラリーマンが、道路を歩いているだけである。特別なものは何もない。しかし、達也からすれば、迂闊に嫌いなクラスメイトと殴り合い寸前の討論を展開しているよりは、この普通な外の景色を見ている方が楽しいのだ。

恐らく、ホームルームが始まるまで、達也の目線が教室の中に戻ることはないだろう。

十分程して・・・。

いつまで経つてもうるさいままの教室の扉が開き、ハゲ頭の見事な教師が入ってきた。あそこまでハゲた頭が輝くとは・・・ある意味芸術だ。と漏らしたのは達也。あの教師、絶対頭にワックス塗ってるぜと言いつつたのは栄司である。

真相は定かではないが、いずれにせよ、この教師がハゲているこ

とは変わらない。

「えー、すでに知っている者もいると思うが、今日からこのクラスに、転校生が二人参加する」

妙な日本語である。しかし、それに突っ込む生徒はいない。

知らなかった者は、そうだったのかと驚いた表情を見せ、知っていた者は自慢げに腕を組んでいる。ちなみに、栄司はニヤニヤと不気味に笑っている。

「先生！女子ですか、男子ですか！？」

「二人とも女の子だ。入ってくれ」

生徒の問いに答え、扉の向こうを見ながら手招きする先生。女の子と聞いて、男子が更に騒ぐ。

うれしそうな者達とは対照的に、達也は驚愕の表情だった。

『馬鹿な・・・！連続通り魔は女！？』

達也が栄司に目をやる。すると栄司はごめんと手を挙げていた。言い忘れていた・・・と言うより、栄司自身も忘れていたようだ。その証拠に、男子達の騒ぐ声に交じって、はあ！？と叫ぶ栄司の声が聞こえていた。

これから入ってくる二人の内、どちらかは何も知らない一般人。そしてどちらかは連続通り魔・・・。達也と栄司の周りに、言い様のない空気が立ちこめる。しかし、他の生徒達はそれに気付かず、転校生が入ってくるのを今か今かと待っている。

そして、その時が来た。

先に入ってきたのは、栗色髪をした、ショートカットの少女だった。可愛いと言う形容詞が適切であろう、明るい感じのする、少女である。

「お早ようございまーす！紅水冥あかみず めいです。よろしくお願いします！」

少女の陽気な挨拶に、約二名を除く、男子達のテンションが急上昇した。少しでも自分をアピールしようと、立ち上がり、大声で叫んでいる者もいる。一方、女子達はというと、たった今現れたばかりの少女に対し、敵意の眼差しを送っている。

達也と栄司は、この大騒ぎの中では声が届かないと思い、目で会話を展開していた。

『・・・どう思う？』

『まだわからねえけど・・・可能性は低いんじゃないかねえか？』

達也も同感だった。第一印象でしかないものの、殺人者があそこまで屈託のない笑顔を振りまけるとは考えにくい。だがもし、低い可能性が当たっていたとしたら・・・。

様々な可能性を忘れぬように意識しながら、二人は次の自己紹介を待つ。

もう一人の少女は、既に教室に入ってきていた。美しいと形容すべきであろう顔立ちと、セミロングの黒髪が、落ち着いた雰囲気を持ち、赤水冥とはちょうど正反対な感じのする少女である。

「今井碧子いまい あおいです。よろしく」

丁寧にお辞儀をし、軽く微笑む黒髪の少女。それを見た男子達は、思わず息を呑んだ。

先程とは違い、今井碧子の高貴な雰囲気圧倒されてしまったようだ。

ここまで静まり返られては、返って話しづらい。達也と栄司は止むなく、また目で話すことにした。

『・・・どうだ？』

『わっかんねえ。どっちなんだろうな』

この時達也は、栄司の動作に違和感を覚えた。何となくだが、彼の反応がどこかわざとらしく、大げさに見えるのだ。

気のせいだろうか。

「えーでは、紅水さんは神崎の隣、今井さんは倉坂の隣で、しばらく過すごしてくれ」

ハゲ教師の指示を聞き、それぞれの場所へ移動する二人の少女。達也と栄司は、男子達の痛い痛い目線に耐えることを強いられてしまった。

しかも、達也の隣に来た紅水へ注がれる目線の中には、殺意を込

めた女子達の視線も交じっている。まさか紅水についたりしないよな？とでも言いたげな女子達の視線が、達也にも注がれる。

周りのことに気付いているのかいないのか、紅水は笑みを崩す事無く、達也の隣に座った。

「神崎君、よろしく！」

「・・・・・・・・」

他人との関わりが苦手な達也にとって、紅水のような性格の人間は、嫌いの部類に入る。無礼かとも思ったが、無視した。

それに紅水がどう反応したのかはわからなかったが、自分に対する警告の視線が、大分軽くなったのを、達也は感じていた。

「おい、どう言うことだよ。聞いてねえぞ」

今井が隣に座るのを確認するや否や、栄司は彼女に文句を言った。彼女はカバンから一枚の紙を取り出し、栄司に渡す。この二人、今日初めて会った者同士には、まったく見えない。

「あの人直々の指示よ。あなたには引き続き、今の仕事をこなしつつ、今回の仕事に協力してもらうわ」

「・・・・たく、無茶言ってくれなせ。あの人も」

達也の知らないところで、何かが動き始めていた。

第一章 疑惑ノ薫リ2

「ねえねえ、神崎君！」

「・・・・・・」

授業が始まって三十分。ショートカットの転校生、紅水冥は依然、達也と話をしようと、頻りに話し掛けている。

しかし、相手が悪い。粘り強い冥に対し、達也は無視をし続けている。

この手のタイプは、相手にするだけ時間の無駄だ。何故か笑いながら話をし、人を小馬鹿にするように会話をやめる。大分問題のある表現だが、結局そう言うことなのだ。

「神崎君ってば！」

冥が声のボリュームをあげた。同時に、体育会系数学教師が冥を睨む。忘れることなかれ、今は授業中である。

教師の鬼のような目によって、有無を言わずに黙らされた冥は、気まずそうに俯いた。これには達也も気の毒に思ったが、結局のところ、自業自得である。達也が冥に声をかけることはなかった。

・・・・・・

そうこうしている間に、昼休み。いつものように、栄司が歩み寄ってくる。無論、弁当を持って。

「行こうぜ、神崎」

「・・・・そいつもか？」

栄司の後ろには、セミロングの転校生、今井碧子。早くも意気投合したのだろうか。

「ああ、そう言うこと。問題ないよな？」

ニヤリと笑いつつ、達也に許可を求める。

却下する理由はなかった。第一印象から判断すれば、冥よりも彼女の方がましだろう。そして何よりも、栄司がそう言っているのだ。たまには頼みを聞くべきだろう。

「・・・わかった」

達也と栄司は普段、食堂で昼食をとっている。栄司は弁当なのだが、達也はそれを用意していない。いや、用意できない。

彼の母親、神崎愛は、十年前に死去。父の正義は、この時既に警察署の署長となっており、息子のために時間を割く余裕がなくなっていた。

その頃から正義と達也の間にすれ違いが生じ始め、今では一緒にいても会話がほとんど発生しない。高校生ともなれば、それが普通なのかもしれないが。

「で、どんな感じなんだよ？紅水は」

食堂へ向かう途中、栄司が問うた。

「どうもこうもない。何度も何度も声をかけてきて・・・教師の声が聞こえなかった

達也はイライラしているようで、手に何かをもっていたら、それを床に叩きつけそうである。

重要な部分を聞き逃しているような気がしてならない。もし少しでも理解できないことがあったら、彼女のせいである。

「俺の見たところ、あいつは相当ガキだな。年齢とかじゃなくて、心がさ。あんまり相手にしない方がいいぜ」

言われなくともそのつもりである。今のところ、達也の冥に対する評価は、最悪と言っている。社交的で明るい少女は、非社交的な少年とわかりあえないものなのだろうか。

栄司の発言も妙である。彼は達也と同じ意見であることが多いが、他人を拒絶することに賛成はしていなかった。ただの風の吹き回しか、それとも意図的に、冥と達也が関わらないようにしているのか・・・。

ピピピピ・・・！

突如、携帯電話の着信音が響いた。今時のＪ・ＰＯＰではなく、ただの電話になる音である。

「あ、ごめんなさい。少し待って」

鳴っていたのは、碧子の携帯電話だった。これには達也も焦った。当然のことながら、この学校は携帯電話の持ち込みを禁止している。それでも持つてくる奴らはいらる。しかし、陰ながら使っている程度で、彼女のように堂々と使っている者は見たことがない。

「はい……。はい、わかりました」

短いやりとりをして、碧子は電話を切った。

「おい、何普通そうに扱っている？」

別に拘っているわけではない。しかしいくら何でも、目の前で自分の守っている規律を平気で破られてしまうと、気分が悪くなるものである。

当の碧子は、電話を切ると同時に何かに焦りだしていた。

「大丈夫よ。許可はとつてあるから。二人とも、私、急用があるから先に帰るわ。ごめんなさい」

「先に帰るつてお前、まだ授業が……。おい！」

栄司が言葉を言い切る前に、碧子は走りだしていた。恐らく、荷物を取りに行くのだろう。

その日、碧子は帰ってこなかった。

人は何故、他人と生きようとするのだろう。醜い心を外面と言う仮面で隠し、好きでもない人のことを気にしながら、日々を生きている。

正直、私にはそれが理解できない。他人なんて所詮、利用する道具にすぎないのに。それに合わせようとする人間が、そして、それが当然のように成り立っている世の中が、理解できない。

とは言え、どんなに下らない何かにも、多少の価値はあるもの。

この世の中は、私の実験室として最適だった。

人が人を殺すことは、どうしていけないと言われるのだろう。ただ生きているものを、動かない肉の塊に変えるだけなのに。

生存する権利の侵害？悲しむ人がいる？多分、どちらも正解だと

思う。だけど、実際人が他人を悪だと感じる要因はそれじゃない。

人が人を悪だと思う本当の理由は、人が人を殺す理由だと思う。

怨恨、金銭欲、憎悪、保身、独占欲、渴望、恐れ、正義感……。それら負の感情が、人を傷つける事の原因力。刃物や鈍器、あるいは拳を通して、負の感情を相手に叩きつける。そう言った、負の感情の醜さから、人は悪と判断する。人を殺す理由から。

けど、この論理で考えると、一つの疑問が湧いてくる。

人を殺す理由が悪の本質なら、理由のない殺人は、悪とは呼べないのではないだろうか。

全く知らない人を、何の理由もなく殺すことは、悪として判断されず、永遠に続けることができるのではないだろうか。

一度は中断させられたこの実験……。今度こそ疑問の答えを見つけよう。

私と、彼で。

殺人事件が起きた。

被害者は町で服屋をやっている五十代の男性。何かしら特別な間柄の人間がいるわけでもなく、特に恨みも買っていない。変にいい人のように扱われている者よりも、凶刃がむく可能性の低い人物であると言えるだろう。

怨恨とは程遠く、又、自宅からは何も盗まれていない。理由の見当たらない殺人事件に、警察では、ある人物の名が浮上した。

勿論、現在脱走中の通り魔である。

警察内では、名前を公開しようと言う意見が相次いだ。少年法に邪魔をされ、いまだに踏み切れないでいる。それにより、一般人は恐怖に怯えながら、日々を過ごすこととなってしまった。

「早速動きだしやがったな。あの店いいの売ってたのによ」

新聞の一面を眺めつつ、栄司は呟いた。その隣では達也が横目で新聞を睨んでいた。

この殺人事件の後、警視總監、神崎正義が会見を行った。無数の記者の前で、名前を公表できないことを話し、頭を下げた。達也にはそれが情けなかった。

正義は昔、達也にこう話したことがある。

「いいか達也。今の警察は不正行為が相次ぎ、一般市民からの信用を完全に失っている。いや、最初からなかったと言っている。しかし、今ならまだ間に合うかもしれない。昔から政府の犬として働いてきた警察を、正義の集団に変えたいと私は思っている。もしそれが叶って、お前との時間をもてるようになったら、ゆっくり話をしよう。お前が何を目標にし、何を想い、何を望んでいるのか。その時が来たら、教えてくれ」

『一体いつ、その時が来る・・・？』

警視總監ともなれば、のんきに子供と時間をとみにしている暇はない。達也も、その事は十分に理解している。

しかし、一度交わした約束をいつまでも延期されたくはない。あと数年もすれば、達也は自立する。その時までに、約束は果たされるのだろうか。

「なあ、達也」

「？」

栄司の声に、いつもの明るさはなかった。それも当然。

「俺たち、何やってんだろうな」

通り魔が学校にいくとわかっていたのなら、今回の犯行を止めることは容易だった。達也と栄司のどちらかが、冥と碧子のどちらかを追っていれば、どっちが犯人かもわかった。さらに、犯行も止められた。

行動できたのに、しなかった。二人はそれを強く後悔していた。行動したときの後悔よりも、行動しなかったときの後悔のほうが大きい。と、誰かが言っていたような気がする。まさしくそれだった。達也を置いて、校舎へ入っていく栄司。その後ろ姿がやけに小さかった。

「・・・・・・・・」

達也は石段に座り、俯いた。授業なんて受けていられる状態ではない。教室に行けば、あの二人と顔を合わせなくてはならない。

そうなれば、達也はクラスメイトの目の前で、二人に大声で問い詰めてしまう。お前が犯人か、それともお前か。公衆の面前で。できればそんなことをしたくない。

どうすればいいのか・・・。

「授業はどうした？」

「・・・・・・・・」

聞き覚えのある声にはとし、顔を上げる。達也の目の前には、ここ最近顔を合わせていない、神崎正義が立っていた。

「な・・・」

何故ここにいるのか。通り魔の件で多忙を極めているのではないのか。

しかも、今は朝九時。当然、公務員は出勤している時間である。それが警察庁の長ともなれば尚更だ。

「十分に多忙だ。今お前が考えていることだな」

達也の胸中を察したようだ。十分忙しい。となれば、余計にわけがわからなくなってくる。

一体何をしにきたのか。学校にきている辺り、達也に用があるのは明らかだが、用件の見当が付かない。そもそも、しばらく放置しておきながらいきなり会いにくるとは、少々身勝手すぎないだろうか。

「そうきつい顔をするな。お前にとっても、重要なことのはずだ」
正義の性格上、さして重要でないことを、わざわざ話しにこないことはわかっている。

達也に関係があり、且つ重要なこと・・・。とくれば、一つしかない。もう少しよく考えるべきだったか。

「先日、お前の組に二人、転校生が来たはずだ。知っての通り、内一人は連続通り魔の犯人。そいつは今、教室で授業を受けているだ

ろう。同じ組である以上、接触は避けられない。いつお前に凶刃が向けられるかわからん。気を付けろ」

前置きが無駄に長かったが、正義の言いたいことは、結局、最後の部分である。

つまり、多忙であるにも関わらず、息子に忠告しにきたのだ。恐らく、警視総監専用の机には、大量の報告書が積み上げられているだろう。

「容疑者は二人だぞ。どちらに気を付ければいい？」

「残念だが、それを伝えるわけには行かない。意味がわからないかも知れないが、わかつてくれ」

わからないわけでもない。一般にすら後悔していないことを、身内に話すのは問題である。正義が捜査の指揮をとるには、秘密は秘密のままにしておかなければならない。

「まあいい。どの道、あんたがやらなきゃできないことだ。忠告感謝する」

この事件、正義でなければ解決はできない。達也は息子として、父親の腕を信用していた。

これ以上話すことはない。教室に戻ろうと、石段から立ち上がる。「待て。もう一つ、言っておくことがある」

正義に引き止められ、戻ろうとする足を止める。何だというのか。「お前にとって、悪とはなんだ？」

「何・・・？」

突然何を言いだすかと思えば・・・。悪とは何かだと？

「覚えておけ。究極の悪は、自分の手を汚さずに、命を狩るものだ」
一方的に言葉を残し、正義は去っていった。

わけのわからない達也は、しばらくその場に立ち尽くした。

第二章 茶色と紅1

世の中にこれほどややこしいことが起こるものだとは、思っていなかった。

死刑を言い渡された連続通り魔が脱走。そいつを含む二人が転校生として俺のクラスに。そしてその三日後に、一件の殺人事件。容疑者は二人。どちらかが連続通り魔。どちらかは恐らく一般人。

『どうやら事件があったとき、二人とも学校にいなかったらしい・・・。くそ、どつちなんだ!？』

碧子が不在だったことは知っている。しかし、冥もいなかったことによつて、事態は達也の中で、混乱を見せている。

ちようど事件が起きたとき、冥はもう時間だから、などと理解不能な言葉を残し、学校からいなくなつていたと、栄司が言っていた。もう時間だから・・・だと? 何だその理由は。どこかのヒーローじゃあるまいし、そんな理由で学校を抜け出すとは・・・。おかげで話がややこしくなつてしまつたではないか。

それらに加え、達也にはもう一つ、解くべき謎がある。

「究極の悪とは、自分の手を汚さずに、命を刈るものだ」

正義の言葉も理解しがたい。確かに、真に賢い犯罪者は、他人の感情を利用して犯罪を起こさせる場合が多い。しかし、今回の事において、それは考えにくい。

「・・・・・」

「お、まーた恐い顔してやがるな」

栄司が机に座っている達也を発見した。いつものようにニヤニヤしながら寄つてきて、いつものように達也の頭を軽く叩く。

この男・・・もう立ち直つたのか?

「いつまでも暗い顔してんなよ。俺が言うのも何けど」

正しくその通りである。一体誰のせいでここまで深く考えなくてはならなくなつたのか。もとを正せば栄司が発端である。まあ、今

更どころ言う気はないわけだが。

栄司の方も、こんなことになるかと予想して、達也に話したのではないはずだ。こんな事が起きていると、他愛も話をしようと思っただけなのだ。

「そう言えば今日もいないな。紅水の奴」

転校早々に学校を抜け出してから、達也の隣の席は空きっぱなしであつた。

学校側にも連絡が届いていないらしく、どう言う事情で休んでいるのかはわからない。転校して間もない、幽霊部員ならぬ幽霊生徒・・・誰も座っていない席が、淋しそうに佇んでいた。

「まだ仮説だけどさ、例の通り魔、紅水なんじゃないか？」

可能性は高い。証拠もなしに人を犯人扱いするのは失礼だ。しかし、使われていない机と椅子が、彼女に対する疑いを増幅させる。

一方、碧子は毎日出席し、その優秀さを勉強で証明している。

この差をみれば、どちらが有力候補か、言うまでもないだろう。「いずれ、また事件が起こるかもしれない。その時までには、結論を出さないとな」

二日後、居酒屋を経営する中年の男性が、遺体で発見された。

「くそつ、またか！」

知らせを受けた達也が、拳を机に思い切り叩きつけた。強い衝撃を受けた机には、大きなヒビが入ってしまった。

また犠牲者が出てしまった。どちらであるか、ひたすら考えていたが、結局結論が出ないままだ。

どちらも怪しい。しかし、どちらも血で己の手を汚すようには思えない。堂々巡りのまま、また一つ命が散った。

「情けない・・・犯人は二人に一人。二択じゃないか。正解率は五十パーセントもあるじゃないか。俺は・・・何をやっている！」

自分への情けなさもさることながら、栄司と顔が合わせづらい。

一体どの面下げて会えばいいのだ。

『たかが二択だと言うのに……。待てよ？』

達也はここへきて、重要なことに気付いた。

そもそも、本当に二択なのだろうか。

考えてみれば、確実に二択だと言う確証はない。栄司から、転校生の一人が連続通り魔であると言われてから、絶対にそうだと思い込んでいた。しかし、冷静になって考えてみると、この学校よりもレクイエム刑務所から近い場所にある学校はたくさんあることに気付く。この学校にくる理由などない。別の学校に行こうと思えば、どうしてもなつていたはずである。

何故わざわざこの学校に来たのか……。何か目的があつて来たとした考えられないが、その理由がわからない。転向する学校を変更してまで、この学校にきた理由……。

その時、ある言葉が達也の脳裏をよぎった。

「究極の悪とは、自分の手を汚さずに、命を刈るものだ」

『……。！』

こう考えるのはどうだろうか。連続通り魔事件は、通り魔個人の行動はなく、そいつ上に、黒幕と言つべき究極の悪が存在しているのではないだろうか。

理由の見当たらない殺人……。それは、誰かの為に行ったものなのかも知れない。もちろん、それによつて罪を逃れられるわけではない。しかし、もしこの仮説が真であるとすれば、黒幕である人物を許すわけにはいかない。

どう言う理由があるにせよ、本来自分の行ふべき犯罪を、他人にやらせているのだ。許される許されない以前の問題である。

わけのわからなかったこの騒動も、ある程度ではあるが、ようやく真相に近づいてきた気がする。一刻も早く、殺人をさせられているのが誰なのか、特定しなければなるまい。

「教室の端で物思いに耽っているなんて、随分陰気ね」

「！……。今井か。俺に何の用だ？」

教室の扉に、今井碧子がもたれかかっていた。いつからいたのかわからないが、全く気配を感じさせないとは・・・できる。

などとふざけたことを考えている場合ではない。ほぼ誰もいない教室に、容疑者の一人が現れたのだ。警戒しなければ。

「そんなに恐い顔しないでくれる？何も取って食べようってわけじゃないんだから」

どうだかな。焼かれるか煮られるか・・・何されるかわかったもんじゃない。速攻で薄切りにされる可能性もある。

いや、薄切りよりもサイコロステーキの方が俺は好きなのだが・・・。

「話があるわ。会議室にきてくれる？」

誰が行くかと言いたいところだが、事の真相がわかるかもしれない。

「・・・いいだろう」

俺の返事を聞くと、碧子は体の向きを変えた。この学校の会議室は、北、南、西の三つの校舎のうち、南館の一階にある。

職員室や校長室から近く、生徒が近づくことはほとんどない。ここ数か月の間使われていないようで、前にみたときには、すべての机が埃をかぶっていた。

「入って」

勿論、達也は会議室に入った。久しぶりにきた会議室は、綺麗に掃除され、チリ一つ内状態になっている。が、そんなことをどうでもいいと思わせるメンバーが、そこに集まっていた。

校長と教育委員長が、部屋ホワイトボードから一番遠い位置に座っている。並べられた机には、警察の制服を着た男たち。しかも雰囲気からして、この者達は一介の刑事ではない事がわかる。そして、窓から外を見ている一人の男・・・。あの後ろ姿は間違いない。「総監、ご子息をお連れしました」

碧子が外を見ている男に敬礼する。報告を受け、警視総監神崎正義が振り返った。

「ご苦労だった、今井刑事。席に戻るといい」

「はっ！」

もう一度敬礼し、碧子は達也をおいて、空いている席についてしまった。勿論達也には、この状況が理解できない。

何かとんでもないことを聞いた気がする。さつき確かに、正義が碧子の事を刑事と呼んだ。

「達也、何をしている。お前はそこだ」

二列目の誰も座っていない席を指差す正義。座れと言っているのだろう。座っている男たちも、同じ事を言いたそうに、達也を睨んでいる。

しかし、何も理解していない達也には、まずやることがあった。

「ど、どう言うことなんだ、これは!？」

何よりも先に、達也は説明を求めた。

何が何なのかさっぱりわからない。今ここにいる警察官は、碧子を除いて皆お偉いさんのように見える。なぜ自分がこんなところに呼ばれたのか。いや、それ以前に、未成年である碧子が刑事とはどう言うことなのか。

「お前の疑問を含めて、今から説明する。まずは落ち着け、そして座れ」

反論する余地もなく、達也は席に座った。それを確認し、正義は最前列に座る。

「・・・役者が揃ったところで、この事件の経緯を、再度確認する。今井刑事」

再確認とは建前で、達也に対する説明という方が正しい。いや、校長と教育委員長に対するものとも考えられるか。

指名を受けた碧子は立ち上がり、前に出てきた。ペンのキャップを抜いたことからして、ホワイトボードに何かを書くつもりなのだろう。

「今から約一カ月前、史上初めて、未成年にして死刑を求刑された連続通り魔が、レクイエム刑務所から脱走。新聞で報じられたのは、

それから約十日後です」

つまり、十日間もの間、警察は通り魔の脱走を隠していたと言う事だ。

「何故今まで黙っていた。警察の面子か？」

不機嫌そうに、達也が問う。助けられたはずの命を犠牲にして、警察は今ごろ本格的な行動を開始。となれば、文句の一つも言いたくなる。大声で叫んでやってもいいくらいである。

「・・・そう思うのなら聞くけど、もしすぐに報道していたら、小学生前後の子供たちは、学校に通えたかしら？」

勿論無理である。連続通り魔などという、危険を形にしたような者が、自分の子供の周辺をうろついているかもしれないと思えば、世間の親たちは即、子供の登校を禁じただろう。

しかし、家に籠もっていた方が安全なのは事実だ。危険を冒さしめてまで通わせる必要があるほど、学校とは重要なものなのだろうか。「まあ、それを真実と取るか、言い訳と取るかは、あなたに任せるけど」

そう言うのと、碧子は次の段階へ行くため、書類をぺらぺらとめくる。任せると言われても、どう判断すればいいのか。

警察側の言い分もわかる。しかし、公表しなかったから、本来よりも多くの命が犠牲になっている。結局、達也が結論を出せないまま、説明は続けられた。

「そしてその後、通り魔がこの高等学校へ入ることを知った我々は、同じタイミングで、転校生という形で潜入する作戦を決行。その際、潜入捜査官として選ばれたのが、私」

時は冒頭へと戻る。

「紹介しよう。今回、対策の要となる・・・今井碧子刑事だ」

異様な雰囲気を漂わせる会議室に、一人の少女が入ってきた。会議に参加している者達は、総監の言いたいことが理解できない。

「総監、何だねその子は？」

「みたところ、高校生程の子供のようだが・・・まさか、その子が要だというのか？」

ああ、ついに総監も狂ってしまったか。その場集った者達は皆、そう思った。たかが子供にできることなどない。

「今井刑事はつい最近、この年令で国家試験に合格し、正式な刑事となった。言うなれば、警察界の新兵器だ」

総監の言葉を聞き、会議室が騒々しはじめる。未成年、しかも高校生が国家試験に合格したとなれば、常識を揺るがす大事件である。通り魔、紅水冥が逮捕された直後に合格した今井碧子の存在を知り、警視総監神崎正義が、こんなときのために就職を許可したのだ。そのために国の偉いさんを、何日もかけて説得しなければならなかったが、無駄ではなかったようだ。

「たった今入った情報によれば、紅水冥は県立謳鳳高等学校に通うつもりようだ。奴と同じタイミングで、今井刑事を転校生として潜入させる。今作戦の概要は以上だ」

そして数日後、今井碧子と紅水冥の二人が、達也のいるクラスに新しい仲間として参加した。

この説明で、なぜ未成年の碧子が刑事になれたのかわかった。

高等学校へ自然に潜入するには、碧子のような、現役高校生と同じ年令の人物が最適だったのだ。そのためにわざわざ国の者達を説得するとは・・・神崎正義、おそろべし。

「そして数日間、私はあなた達のクラスメイトという肩書きで、捜査をしていたというわけ」

碧子が学校内で、平然と携帯電話を使っていた理由がわかった。もし緊急の情報が入ったとき、それを早急に伝えられないのだ。

そう言う事情から、校長や教育委員会に許可を求めたのだろう。なるほど。しかし、そこまで進んでいたのなら、なぜ早くあいつ

を逮捕しない？」

これだけの面々が集まっていれば、いかに連続通り魔と言えど、逮捕することは容易いはずだ。

なぜそれをしないのか、その理由は、驚愕すべきものであった。

第二章 茶色と紅2

「きれい・・・」

達也や警視庁の重鎮達が、学校の会議室に集結している頃、その屋上に、二人の男女がいた。

学校は、周りに建物があまりない土地に建てられたので、景色を遮るものがない。特に、太陽が山に沈んでゆく際の夕焼けは格別であった。中には夕方、好きな相手を屋上に呼び出し、思いを伝える者もいるらしい。

二人は肩を合わせながら、その景色を眺めている。二人の表情は、幸せそのものだ。

「ずっと、お前とこの景色を眺めたいと思っていた・・・ずっと」

二人は互いが関係していることを、何としても隠さなければならなかった。顔を合わせても、さも無関係かのように、すれ違わなければならなかった。

それがどれほどの苦痛なのか・・・それは、直接体験した者にしか、わからないことである。

「本当にいい景色。カメラ持ってくればよかったあ・・・」

残念そうに言いつつも、その景色から目を離そうとはしない。自分が最も愛する人が見せてくれた、最高の景色。ずっと見ていたいと思うのは、ただ純粹にうれしいからだろうか。それとも、一度目を離してしまい、二度とこの景色が見れなくなるのを恐れているからなのか・・・あるいは、その両方が。

「冥・・・」

少女の名を呼ぶと、少年は少女を抱き締めた。今まで耐えてきた分を、互いに辛かった事を払拭し、同時に、これからはずっと一緒であることを伝えるために。互いに互いの温もりを確かめ合うために。

「お前が捕まっちゃってしまってから、ずっと悩んでいた。俺は正しかっ

たのか、お前にあんなことをさせてよかったのか……。お前がない間、俺の心は濁っていたのかもしれない」

抱き締める力が強くなる。しかし、痛みはない。力の強さに比例して、少年の想いが伝わってくる。

冥の頬を、透明な雫が伝った。

「けど、もう大丈夫だ。お前がいてくれる限り、俺は迷わない。今まで辛い思いをさせて悪かった。よく……。本当に、よく帰ってきてくれた。もう、絶対に離さないからな……。！」

冥が捕まってしまう前から、少年の心には大きな穴が開いてしまっていた。最愛の人が、自分のせいで逮捕され、拳げ句、死刑を宣告されてしまった。

自分が首謀者なのだと、警察に名乗り出ようとさえ思った。しかし、それでは彼女との約束が果たせない。

二人は誓った。社会を変えようと。二人の力で、国そのものを動かそうと。その約束を果たすためには、少年が捕まらないことが絶対条件だった。

彼女が逮捕されて、しばらくたった頃である。冥を失い、途方にくれていた少年の元に、冥からの手紙が届いた。

会いに行きます。

手紙には、その一言だけが書かれていた。少年は驚愕し、そして歓喜した。

そして、冥と碧子が転校生として学校を訪れたあの日、二人は再会を果たした。しかし、公衆の面前で、再会を喜び合うわけにはいかなかった。

そんなことをしてしまえば、芝居をうってまで、自分と冥は無関係だと思わせていた達也や、隣で冥を睨んでいた碧子に疑われてしまう。その後も二人きりで会う機会がなく、今日に至ったのである。しかし、たとえ会えずとも、冥は自分のやるべきことをわかっていた。

この学校にきてから今日までの間に、冥は数人の命を犠牲にした。

そしてその行動は、二人の目標達成に向けて、さらなる前進を促したのだった。

「早く、二人で話したかった。こうしたかった。本当に帰ってきた実感がわかなくて、これは夢なんじゃないかって、不安で仕方なかった。でも、今なら・・・夢じゃないって思える今なら、言える」冥も少年を強く抱き締めた。ずっと言いたかった言葉を、より近くで伝えるために・・・。

「ただいま、栄司君・・・！」

達也は絶句した。正義の口から放たれた、とんでもない言葉に。「今・・・何と言った？」

達也の手が震えている。冷静に受けとめられる状態じゃない。それを理解しつつも、正義は再説明することにした。

本来ここにいるべき、ある人物のことを。

「・・・今井刑事がこの学校に潜入する前、私は既にもう一人の刑事を、ある名目で潜入させていた」

混乱しないように、正義の言葉一つ一つを、ゆっくり解釈していく達也。彼の表情には、底無しの絶望が浮かんでいた。

「その刑事を送り込んだ理由・・・それは達也、お前を友として見守らせるためだ」

達也が高校に入ったとき、既に彼は他人を寄せ付けない雰囲気を放っていた。周りの人間達が徒党を組み、派閥を形成していく中で、彼は一人だった。

そんな達也にただ一人、声をかけた人物がいた。

茶色の髪と軽いノリ。その人物をどう解釈すれば、彼が刑事だということかわかるのだろうか。

倉坂栄司・・・徐々に打ち解けていった彼らは、互いにとって、唯一無二の親友となっていた。

「彼は今井刑事と同じように、未成年にして刑事となった。優秀さ

もさることながら、彼の気楽な性格が、いつか刑事という職のイメージを変えるだろうと、期待していた」

どうやら栄司は、正義の期待の星だったらしい。新たな警察・・・正義はどのような警察の理想を描いていたのだろうか。

「だが、携帯電話の発信履歴に、紅水冥の携帯へかけた記録が残っていた。それによって、彼と紅水冥が、何らかの形で関わっていることが判明。それについて詳しく調べるよう、今井刑事に連絡した」
恐らく、碧子が堂々と携帯を使っていたあの時だ。あの短い応答の中では、とてつもなく重要な会話が展開されていたのだ。

自分の期待していた人物が、最悪の形で裏切った。信じたくはなかっただろう。しかし、警視総監と言う立場上、捜査に私情をからませるわけにはいかない。正義は断腸の思いで、碧子に電話をかけた。彼はどんな様子で碧子と話していたのだろうか。

「・・・今井刑事が倉坂栄司の親族に聞いたそうだ。彼には、同年代のガールフレンドがいたと。その女の子こそが、紅水冥だった」
「・・・」

達也は何も言えないままだ。ただ、警察はこれから先、倉坂栄司と紅水冥の二人を逮捕するために動くだろう。それだけは、理解していた。

ただいま。その言葉には、逮捕され、裁判を受け、死刑を言い渡され、脱走し・・・今までの辛い時間のすべてが込められていた。それを受けとめようとするかのように、栄司はもう一度腕に力を込めた。

「おかえり、冥」

体を離し、冥の目を見ながら、栄司は応えた。冥の言葉、想い、全てに。

「・・・これからどうするの？」

もうこの学校には留まらない。二人のことに、警察も気付いてい

るはずだ。すぐにでも行動を起こすだろう。警察の指揮をとっているのがあの人なら、尚更だ。

全てを理解し、栄司は笑みを浮かべた。

「決まってるだろ。犯罪を終えた犯人がとる行動は一つ・・・」

あの人に教えてもらった。感謝しないとな。

「逃亡・・・さ」

達也は一人、誰もいなくなった会議室にいた。夕方だった。

正義や碧子、そして警察の重鎮達は、この町の警察署に捜査本部を構え、倉坂栄司と紅水冥の行方を追うらしい。当然だろう。幾つもの命を奪った危険人物達を、放置しておくわけにはいかないのだ。達也は迷っていた。このまま何もせず、ただ結果が出るのを待つか、それとも・・・。

恐らくこの決断が、この人生最大の別れ道だ。それぞれの方向には、全く違う未来が待っている。どちらに行くかは、達也次第である。

「・・・」

達也が椅子から立ち上がる。前言撤回。迷うはずがなかった。そして栄司も、迷ってはいないだろう。

お前が逃げるなら、俺は追うしかない。達也の目は確かに、栄司の後ろ姿を捕らえていた。

翌日、警視総監の急遽行った記者会見で、この事件の構図が明確になった。

「先日報道されたとおり、死刑囚紅水冥がレクイエム刑務所から脱獄。依然、共犯者の倉坂栄司と逃亡を続けています」

静かな記者会見である。カメラの音こそ聞こえるが、記者達が正義の言葉を遮る気配はない。

この様子は生中継されている。全テレビ会社の放送を一時中断し、全国の家へと繋がっている。誰もが、正義の言葉を黙って聞いて

いた。

「これから発表する地域の方々は今後、老若男女に関わらず、可能ながぎり外出を控えて下さい。彼らは危険です。我々も最善を尽くしますが、皆さんの安全をお守りできるかはわかりません」

実に素直な言葉だった。無駄に警察の威信を守ろうとするよりも、よっぽど効果があるだろう。

とは言え、この発言は一般人達を大きな不安の中に追いやるものだ。反発は起きるだろう。そのことは正義を初め、警察の重鎮達全員がわかっていた。

「今この時より十二時間の間、全警察官が出動し、皆さんを護衛いたします。その間に、一般の方々には、これからしばらく、家に引きこもるための準備をしていただきます。その時間を過ぎてから、皆さんの安全は保障しかねます。無責任かとは思いますが、皆さんのご協力をお願いします」

正義が深く頭を下げ、記者会見は終了した。警戒すべき地域のスーパー、コンビニ等が、押し寄せる客であふれ返ったのは言うまでもない。

「タイムリミットまであと三時間。それから数日、一般人は自宅に張りつけ状態になるわけですね」

時計と外に何度も視線を移す碧子は、珍しく緊張しているようだった。無理もない。

実際のところ、これはかなり分の悪い賭けだった。家に籠もった者達が、いつまで大人しくしていてくれるかはわからない。彼らが従ってくれている間に、警察は冥と栄司を発見、逮捕しなければならぬ。

捜査している間に犠牲者が増えないようにするには、この方法しかなかった。時は一刻を争っている。のんびりしている時間はないのだ。

そしてこの捜査には、もう一つ問題がある。

指定された町の者達を家に籠もらせることは、一切の目撃証言も

得られないということだ。

時間もない、情報もない。警察の勝ちは、万に一つの確率といえる。

「間に合うでしょうか」

「間に合わせるしかないのだ。ここまでしておいて、間に合いませんでしたで済むはずがない」

警察の重鎮達は皆、正義の一挙一動に注目していた。もし間に合わなければ、全ての責任を彼にとらせる魂胆だろう。それがわかるだけに、碧子はさらに緊張せざるをえなくなった。

うまくあの二人を逮捕しなければ、正義は間違いなく辞任させられる。そうなれば、彼の言う、新たな警察が完成しないまま、彼は警察を去ってしまう。それは、警察が永遠に進歩しないことを意味していた。

『国民の信頼を失った警察を変えられるのは総監しかいない・・・何としても成功させないと』

現在の警察の状況はかなり深刻である。今の世の中、警察を心から信用している人が、一体何人いるだろうか。

ほとんどの者は警察を信じられず、自分の身は自分で守らなければならない。その心意気自体は悪い傾向ではないが、そう思わなければならない時点で、警察の威信は失われていると言っている。

碧子の見るかぎり、崩れ落ちた警察を変えられるのは、神崎正義ただ一人なのだ。

「少し、緊張しすぎじゃないのか？」

「！・・・あなたは」

突然声をかけられ、慌てて振り返ると、そこには達也がいた。

「ど、どうしてあなたがここに・・・」

「大変だった。ここを見つけないとじゃなく、ここに入ってくることに」

警察署の入り口では、何人かの警察官が立っている。彼らに気付かれず、入ってくることは不可能だ。

どうやったのかは知らないが、彼がここにきてしまったことは問題である。

「ここは捜査本部よ！？一般人が入っていいところじゃ・・・」

「待て、今井刑事」

達也に説教しようとしたのを、正義が制した。彼の手には手帳らしき物が握られている。

「・・・覚悟はできているな？」

短い問いだった。だが、その一言の中には、幾つもの意味が込められている。達也を貫くように見下ろす正義。

もちろん、覚悟はできていた。そうでなければ、わざわざここに出向いたりはいしない。正義の目を、達也は真正面から見返した。

「・・・ああ」

こちらも一言だった。それで十分なのだろう。

「では、これを持って」

正義が手に握っていた何かを投げる。達也はそれを力強くキャッチする。

投げられたものには、警察を示すマークがあった。黒い革で覆われたそれを開くと、達也の顔写真が貼られている。

それは、自分が警察官であることを示す手帳。正義や碧子が持っているのと同じ物である。

「そろそろ時間だ。いつでも出られるようにしておけ。神崎刑事」
その言葉に答えるように、達也は警察手帳を強く握り締めた。

第三章 Sky blue, meets Justice 1

その時はきた。十二時間が過ぎると同時に、危険地域に該当する警察署の全刑事が出動した。その中に、達也と碧子もいた。

当然のことながら、警察は幾つもの課に別れている。通常、その内の幾つかが、街を歩いて聞き込みなどをするのだが、今回は違った。

警察に属する全ての人材が、倉坂栄司と赤水冥の追跡に駆り出された。二人が銃や刃物を持っている可能性もある。もしもの時に備え、全員が武器になる物を携帯している。

街は静かだった。住民達は自宅に引きこもり、逃亡者が捕まるのを待っている。だが、いつまでこの状態が保てるだろうか。

「時間がないわ。あなたは私と一緒にきて」

碧子にそう言われ、達也は彼女と行動することになった。

いつ犯人に襲われるかわからない。警察関係者は、数人でチームを作り、まとまって行動している。もし碧子に声をかけられなければ、達也は確実に孤立していただろう。

「いい？絶対にみんなの邪魔になるようなことはしちゃダメよ。ただでさえあなたは国家試験もなしに刑事になって、みんなに快く思われていないんだから」

確かにその通りだった。碧子や栄司でも歓迎はされなかっただろうに、親の力で刑事の一員となった達也が受け入れられるわけがない。他の刑事達を納得させるには、一刻も早く自分が使える人間であることを証明しなければならない。足を引っ張るなどもってのほかだ。

「・・・気を付けよう」

さすがの達也も、この状況で仲間といがみ合う気にはなれない。経験のない自分は、先輩の荷物にならないように注意するしかなかった。

空は雲で覆われている。これは一雨くるかもな……。そう思いつつ、静まり返った街を歩く。

普段は人で見えないところが見えるようになり、街が広く思えた。改めて、この街の広さを認識する。

「あなたって馬鹿よね」

沈黙の続く重苦しい空気に耐えかねたのか、隣で歩く碧子が口を開いた。

「何？」

「だってそうでしょう？聞いた真相を喋らないように注意してさえいれば、いつも通りの生活を送れたのに、わざわざそれを投げ出して、危険なことに首を突っ込んでるんだから」

碧子の言い分は正しかった。達也や碧子、栄司と冥が通っていた学校及び校区は、危険地域に指定されていない。栄司と冥が、学校に戻ることは考えにくいと言う理由からである。

つまり、達也は今まで通り、つまらない学校生活を送ることができたのだ。いつもどおりだ。栄司がいらないと言う点以外は。

「そうだな」

認めよう。しかし、元より学校と言う集団行動が必要とされる場所に、居続けるつもりはない。そこに友が居ないのならばなおさらである。達也の場合、栄司の存在が達也に学校へ行く意欲を出す源だったと言っている。それがなくなってしまった今、何の価値もない石ころが転がっている公共施設に通う理由は何もないのだ。

「……まあ、総監はそれを期待してたみたいだけど」

「……そうなのか？」

学校の会議室で、事態の説明が終わった後すぐ、正義は去っていた。その態度は捜査に参加することを期待しているどころか、達也を拒絶しているようにも見えた。

そう言えば、あの人は昔から素直じゃないと、ずっと昔に母さんに聞いたことがある。母の死から十年近く……。わずかに残ったこの記憶も、いずれは時の忘却にさらされる。わかっていたことだが、

改めて考えると口惜しい。

「私が任務に就く少し前に、総監からあなたの話を聞いたことがあるの。無愛想な息子がいるって」

これは意外だ。あの徹底した仕事人が、他人に自分の息子のことを話すとは。

「きつと任務で会うだろうから、よろしく頼むって言ってたわ」

あの親父・・・性に合わないことを。

ともあれ、俺はまんまと奴の期待に応えてしまったらしい。失敗だったか。この辺りで話を変えておくべきだろう。

「・・・今井」

「何？」

碧子の髪が、微風に吹かれてなびいている。この場に雑誌の編集者が歩いていれば、すかさず碧子をモデルとしてスカウトしていただろう。

「お前、どうして刑事に・・・」

本人が自分の容姿について自覚していないと言う事は考えにくい。どうにでもなったであろう人生を、警察といういいイメージのない職にあてたのか。

もちろん、何かしらの理由があるのだろう。何となく、それを知りたくなった。珍しい事もあるものだ。

「意外ね。あなたが他人のことに興味を持つなんて」

「・・・確かにそうだろうが、もう少し言い方を考えたらどうだ？」
苦笑いを浮かべる達也。自覚はしていたが、少しの間しか時間を共にしていない人物に自分を理解されるとは・・・。そんなに自分は単純なのかと、内心肩を落としている。

碧子は面白そうに微笑んだかと思うと、すぐに表情を戻し、空を仰いだ。

十二年前、当時四歳の今井碧子は、街の大通りを一人で歩いてい

た。

もちろんこれは妙である。幼い女の子がたった一人で、どこかを目指すわけでもなく歩いているのだ。

しかし、世間とは冷たいものである。街を歩く一般人達は彼女を見ても、きつと保護者が傍にいるんだと勝手に解釈し、少女から目を離す。

思えば、それも当然のことなのかもしれない。

もし仮にこの状態がおかしいと思ったとしても、迂闊に話し掛けようものなら、自分が怪しい目で見られてしまう。世の中の目を執拗に気にする社会人たちはそれを恐れ、行動することができないのだ。

そして心の中で形だけの謝罪をし、さも何事もなかったかのように去っていく。世間に敵とみなされないために。

一瞬自分に絡み、そして離れる他の目線。少女はそれに不快感を抱いていた。彼らの目線がまるで汚物でも見るかのようなもの思えてしまう。見られるたびに少女は目線を振りほどくように、歩くスピードを上げた。

『・・・！』

周りを気にせず歩いていると、誰かの足にぶつかってしまった。

いつの間にか、少女は裏路地に入ってしまった。少し不安に思いながら、少女が顔を上げる。

「あ？何だてめえ」

そこには柄の悪そうな太い男が立っていた。至る所に傷があり、それなりに迫力がある。

しかし、それぐらいで怯む少女ではない。大の男でさえ目を背けそつな、殺意を込められた目線に対し、真っ向から見返す。が、相手が悪い。

この太い男は、いわゆる暴力団と言う奴の一員であり、つい最近虐殺事件を起こし、全国で指名手配されている。そんなことを少女が知っているわけもない。

「生意気な目えしてるじゃねえか。ガキだからって容赦はしねえぞ」
男は少女の頭を掴み、自分と同じ目線の高さまで持ち上げる。少女は暴れようとはしない。

少女に生きる意志はない。男を睨み返したのも、そうすれば彼が怒るであろう事を計算した上での事だ。ここで命を落とすなら、それもいい。

男はニヤニヤ笑いながら、少女を驚掴みにしたほうの手を後ろに回し、逆側の足を上げる。要するに振りかぶっているのだ。

野球投手さながらのフォームをとる男の目は、真つすぐに地面を睨んでいる。これからどうする気なのかは言うまでもない。しかし、男はそれを実行することができなかった。

「あ……？」

肩を叩かれ、振り替える男。彼の視界は目の前の拳に占領されていた。

ゴツ！

「ぐあつ……！」

頭を掴んでいた手が離れ、少女が自由落下する。しかし、その体が地面にぶつかることはなかった。

大きな腕が少女を包み、落下を止めたのだ。停止に気づき、瞑っていた目を開ける。

「怪我はないか？」

少女を受けとめたのは警察官だった。派出所などにいる警察よりも多少装飾があるように思えるが、それでもほとんどは紺一色。洒落てはいない。

警察官の男は真剣な恐い目で少女を見ている。こういう場合、優しく語り掛けるなり笑顔に繕うなりすべきなのだが、彼は不器用さ故にそれができなかった。それを少女が理解できるわけがない。若干の恐怖を覚えた。

警察官は少女をおろすと、男の両手に手錠をかけた。そして無線機……ではなく携帯電話を取り出し、でた相手と短い会話をして

切った。

「すぐに私の仲間がくる。君にも一応、一緒にきてもらおう。いいな？」

ここで嫌だと言ったらどうなるのだろうか・・・と思ったが、さすがにそれはまずい。少女は頷く事にした。

しばらくすると別の警察官が現れ、少女を助けた警察官に敬礼する。どうやら、彼はそれなりの地位に立っているようだ。

彼の言っていた通り、少女はパトカーに乗せられ、その場から去った。行き先はもちろん、警察署である。

移動中、少女は捕らえられた男の隣に座らされていたが、あの人が気を遣ってくれたのか、位置を交替してくれた。交替するとき、手錠かけられた男に、強く睨まれた気がした。

それからしばらく、少女はミラーに映ったあの警察官を、ただ眺めている。彼は大体二十代後半ぐらいのようで、パトカーを運転している警察官よりも若く見える。実際に若いのかどうかわからないが、少女の見た感じ、あまり年はくっていないさそうだった。

少しすると、警察署に到着。思っていたとおり、貧相な建物である。もちろん、少女たちは中に入った。

今回の場合、巻き込まれただけの自分は、適当に事情を話せば終わりだと思っていた。しかし、そうはいかないらしい。

「・・・もう一度聞くぞ。君の名は？」

いい加減にしてくれと言いたげな、老け顔の警察官が問う。

困ったことになった。事情を聞くために、警察はまず少女の名を知ろうとした。が、少女は自分の名を名乗ろうせず、そのまま黙り込んでしまったのだ。

沈黙し始めてから、すでに二十分ほどの時間が過ぎてしまっている。

「・・・・・・・・」

「やれやれ、どうしたものか」

警察官が困った表情で頭を掻く。本来なら、無理に名を知らせる

必要はない。しかし、時は夜の十一時。

夜の町は物騒である。現に、彼女は危ないめに遭いかけた。なぜ彼女のような幼い子供が、真夜中の街を歩いていたのだろうか。

とは言え、ひたすらそれを追及するほど、警察も馬鹿ではない。

そんなことをすれば、子供は怯えてしまっただろう。そこで、まずは彼女の保護者を呼ぼうと思い、名前を聞いているのだが・・・この調子である。

これでは、少女を帰らせることもできない。

「・・・署長！」

ギイと音を立て、部屋の扉が開いた。中には入ってきたのは、少女を助けた警察官。先程の発言から察するに、彼はこの警察署で最も偉いらしい。

ずっと変化のなかった少女の表情が、わずかに明るくなる。本当にわずかだったため、それに気付く者はいなかったが。

「どうだ？」

「だめです。何も話してくれません」

ふむ・・・と署長が少女を見る。

「・・・私が話を聞く。君は奴を見張っていてくれ」

「え・・・あ、はい」

警察官は何か言いたいことがありそうだったが、結局何も言わずに部屋を出ていった。

それからすぐに、署長は椅子に座り、少女と向かい合う。

「何が聞きたいかは、わかってるな？」

少女は黙っている。それを肯定とみなした署長は、座ったばかりの椅子から立ち上がる。

少女が見上げると、若き署長はわずかに笑いながら、少女を見下ろしていた。その表情に、何となく温かみを感じた。

「他人の名を聞くときは、まず自分から名乗らねばな」

そう言って、彼は手を伸ばした。少女の細く白い手とは違い、大きく、今までの人生が凝縮されている・・・そんな感じのする手だ

った。

「神崎正義だ。よろしく頼む」
少女と男は出会った。

第三章 Sky blue, meets Justice 2

少女が正義の手を握る。温かい・・・少女はそう思った。今まで生きてきて、これほど身も心も温かい感じのするものに触れたことがあっただろうか。

この世に生まれ出でてから四年。人も物も、少女が触れるものすべてが、凍えるかと思うほど冷たかった。純粹な子供であった少女は、この世界に存在するものすべてが冷えきっているのだと思っていた。

けれどこの人は、今まで見てきたものとは違う。そんな気がする。「さあ、君の番だ。名を教えてくれ」

正義の目は真剣だった。その目を見れば見るほど、少女は申し訳ない気持ちになった。

若干四歳の少女に対しても礼儀を怠らない。その誠実さに答えることができない。少女にできる返事は、一つしかなかった。

「・・・ない」

「！」

少女の口から漏れたわずかな声を、正義は確かに聞き取った。聞き間違いなどではない。この少女は、無いと言った。

何が無いのか、それは会話の流れから容易に読むことができる。

「名が・・・無いのか？」

少女が頷く。何という事だ。答えの無い問いを、警察は投げ掛けていたのか。黙り込むはずだ。自分の名前がわからないのだから・・・。

「すまなかつたな。無理な質問をしてしまった。しかし、君の家族は？」

今度は横に首を振る。少女は生まれた直後、孤児院に預けられた。ずっと生きることに無気力であった少女は、ついに孤児院を抜け出し、夜の町を彷徨っていたのだ。

なら孤児院に帰せばいいではないかと思われがちだが、そう簡単にはいかない。

と言うのも、少女は孤児院の住所を覚えていなかった。四歳の子供でも歩いてこれるであろう孤児院はいくつかあり、名もない少女がいたそれを特定するには、相当の時間がかかるのだ。

『それまでの間、ここで預かるか・・・』

一日や二日、少女一人を預かることは造作もない。少し可哀想だが、いつも自分が寝ているソファを使ってもらうとしよう。では正義はどうするのか疑問に思った方々、心配は無用である。

床で寝る。

とりあえず、この少女に関しては目処が立った。残るは・・・。

「・・・？」

突如、正義が椅子から立ち上がった。その行動に、少女は首を傾げる。

「可能なかぎり早く、君のいた場所を見つけるために調査をさせる。しかしその前に・・・わかるな？」

男の事情聴取だ。正義がこの部屋にきた時点では、何の進展もなかったのだらう。署長自ら二人に事情聴取・・・よく働くお偉いさんである。だからこそ、少女も彼を信じる気になったのだが。

「眠くなったら、ソファを使ってくれ。申し訳ないが、それで我慢してほしい」

少女はもう一度頷いた。居住している場所が判明するまで預かってくれるといっているのだ。その上で文句を言うのは横暴だらう。

「・・・一つ、聞いておきたい」

ドアノブに手を掛けたところで、正義が振り返る。彼と話す機会が増えたためか、少女が勢い良く顔を上げた。

「名が欲しいか？」

普通であるならば、考えられない質問である。人として存在する者に対し、名が欲しいかなどと言う問いをすることになるうとは・・・。

今、正義が何を考えているか、察しのいい人ならば解釈できただろう。しかし、相手は四歳の少女である。彼の胸中を察することなどできるはずもない。

名前とは、自分が自分であると確認するための・・・自分を他の人間と区別するためのものである。それがないと言うことは、己を確認できず、他と区別できないことと言える。

考えてみてほしい。もし今、自分に名がなかったとして、それによつて発生する孤独感に、あなたは耐えられるだろうか。自分が誰かもわからない。誰も自分の名を呼ばない。呼んでもらうことができない。誰も自分の存在を証明してくれない。自分だけが、違う世界にいるような感覚・・・。それにあなたは正気でいられるだろうか。

早くこんな状態から抜け出したい。自分の存在を確認したい。その思いのまま、少女は頷いた。

「・・・そうか」

ふむ・・・そうか。少女の返答に心底同意したのか、正義が何度も頷く。

その様子が、何となく可笑しかった。

「初めて見たな。君の笑顔を」

「・・・！」

自分が笑っていることに気づき、自身で驚く少女。自分からしても、よほど珍しい事なのだろう。もしかしたら、今が初めてなのかもしれない。

「その表情を忘れるな。そのように笑顔でいてこそ、君はより輝くことができる」

そう言つて、正義は部屋を出ていった。

これはまた照れ臭い台詞をぽんぽんと・・・言っていて何ともないのだろうか。半ば呆れつつ、少女は高い椅子から下りる。

眠りにつくわけではない。あの人の近くにいたいのだ。邪魔になるかもしれないが、彼の温かさを忘れたくはない。

少女がドアノブに手をのばす。本来なら冷たいそれに、彼の温かさが残っていた。

「いい加減に答える。お前の仲間はどこにいる!？」

「知らねえな。何せ俺はごく普通の一般人なんぞね」
なるほど。これは曲者だ。

男の事情聴取を初めてから数時間。少女のところから戻って来た方がいいが、思ったとおり何の進展もなかった。相手は悪の権化。そう簡単に口を割るとは最初から思っていない。捕まえられただけでも上出来というものだ。あの子に感謝しなければな。

しかし、このまま何も聞き出せなければ、証拠不十分でこいつを解放せざるを得なくなる。裏組織を壊滅に追い込むチャンスなのだ。一つでも多く情報を……。

ガチャッ!

部屋の扉が開いた。突然のことに、その場にいる全員が扉の方を睨み付ける。

「……………」

扉を開けたのはあの少女だった。睨まれたことに驚いたのか、少し怯えているように見える。正義が目当てなのだろうが、タイムミングが悪い。

「こら君、勝手に入っちゃダメだよ」

直ぐ様警官が注意する。うるさい。こんな奴に用はない。

警官を無視し、男の方に歩み寄る。当然、男は手錠をかけられている。だが、そんなことは関係なく、彼の目は狂気に満ちている。多少の恐怖はあったが、問題ない。

「き、君!」

「待て」

少女を怒鳴り付けようと声を荒げる警官。しかし、正義がそれを制した。彼には少女の意志が伝わっていた。そして少女にも伝わっ

ていた。何が起きようと、彼が必ず助けてくれると。

「・・・銃」

「あ・・・？」

少女の言葉の意味がわからないらしい。無理もないだろう。いきなり銃の一言では。

「・・・銃、持つてる？」

これは驚いた。若干四歳の少女が銃という言葉を知っていようとは。それほどこの国が荒れているという事なのか・・・。

正義が複雑な心境に浸っている間にも、話は進む。

「はあ・・・？持つてるわけねえだろ。俺はごく普通の一般人なんだぞ」

嘘臭い。そして白々しい。正義がイライラし始めた時、少女が僅かに笑った。まるで勝ちを確信したかのように。

「・・・あの硬いの、何？」

自分の頭を指差しながら、男に問う。その瞬間、男の表情が曇った。

馬鹿な・・・！さっきは銃を持っていなかったはずだ。いやしかし、このガキが・・・。まさか持ちっぱなしだったのか？いや、だったら今も持っているはずだ。いやいや、あの男に殴られたときに落としたのかも・・・。

男が混乱し始めていることに、少女が気付かないわけがない。さらに追い打ちをかける。

「・・・ねえ」

「何だ？・・・！」

今度は正義に声をかける。最初は戸惑っていたが、要求されていることを理解した。隣にいた警官に何かを指示し、外に出す。ちなみに、男は混乱していて彼らの行動に気付いていない。

プルルル・・・プルルルル・・・。

携帯電話の音が鳴った。何の飾りっ気もない音が、部屋に響く。

「・・・私だ」

どうやら正義の携帯だったらしい。男と少女に背を向け、相手と対話する。

まさか・・・銃が見つかったのか！？男はおろおろしている。その様子を見ながら、少女は面白いものでも見るかのように微笑む。気が付いているだろうか。男の頭の中では、すでに銃を持っていたことになっている。ついさっきまでは半信半疑だったというのに。そして、更なる攻撃を実行する。

「何だと!？」

正義が大声を上げた。途端、男が一気に青ざめる。発見されてしまったに違いない。何ということだ。

それにしても正義・・・割りと上手い。そう思いながら、少女が最後の攻撃に移る。

「ねえ、あれ何だったの？」

「・・・!」

もはや絶体絶命・・・こうなったら手は一つしかない。

「お、俺の意志じゃないんだ！組織の長に言われて・・・」

「長・・・？その人どこにいるの？」

少女が首を傾げて問う。作戦どおり。そう思った男は、全てを吐く。

「三丁目の坂崎ビルがアジトなんだ・・・長はそこにいるよ。俺は強引に銃を持たされてたんだ、信じてくれ！」

無理矢理やらされたことにして、自分は罪から逃れる。男はうまく行ったと思った。しかし・・・。

「・・・なるほど」

パタンと携帯を閉じ、向き直る正義。続いて、先ほど出ていった警官が帰ってきた。少女はと言うと、男に背を向けてくすくす笑っている。

「坂崎ビルに十数名を向かわれる」

「はっ!」

さっき入ってきたばかりの警官が、急いで出ていく。少女は今だ

に笑っている。ここまでうまく行ったのが面白くて仕方ないのだろ
う。

一方、男は状況が理解できず、啞然としている。そんな男を置いて、二人は出ようとする。

「お、おい、一体どう言う・・・」

男の問いに、正義が振り替える。

「感謝するぞ」

その一言を聞いて初めて、男は全てを理解した。

「ご苦労だったな。おかげで助かった」

二人がいるのは警察署の屋上。高さはマンションの四階ほど。空にはいくつか星が輝いている。

空気の汚れた都会では、見える星が少ない数えることはできないが、田舎に比べればはるかに少ない。

「将来、警察官になれるかもしれない」

正義は愉快そうに話している。少女はただ、正義の横顔を見ている。

「君のような人物が、警察の未来を変える」

「・・・あなたは変えないの？」

素朴な問い。正義はた目息をつく。己の無力さを悔やむかのよう
に。

現在、正義は警察署署長。彼よりも上の立場に立つ人間は何人も
いる。今変えようと思っても、彼の地位ではどうしようもない。警
察を進化させるには、もっと上へ行かなければ。

「・・・」

正義の胸中を察し、言葉がない少女。相手への気の遣い方、回転
の早い頭脳・・・どれをとっても四歳のものではない。

男に組織のアジトを吐かせた少女を見て、正義は思った。天才だ
と。

「・・・警察にこないか？」

「え・・・」

下心がないと言えば嘘になる。彼女のような天才が警察にきてくれれば、警視庁は大きく前進する。一人の力には限度があるが、他の逸材が見つけれれば、革命も夢ではない。

身勝手極まりないが、警察を変えるためには・・・。

「・・・約束」

気が付くと、少女は指切りの形を作り、自分に向けていた。

「私が警察官になるまでに、一番上にいつて。そうしたら、あなたを助けてあげるから」

「・・・！」

警察の一番上・・・つまり警視總監。それは警察に革命を起こすための絶対条件である。少女が警察官になるまで十数年。その間に、警視總監になれば、全ては揃う。

それにしても、なんと頭の回る少女なのだろうか。自分が期待されていることを理解している上で、正義に更なるやる気を出させようとしている。改めて、この少女の聡明さに気付かされる。

「・・・うむ。いいだろう、約束だ」

二人は約束を交わした。十何年も先に果たされる、長い約束を。

「・・・と、忘れるところだった」

突然紙とペンを取り出し、恐ろしいほどの速さで何かを書く正義。それを見ながら、少女は首を傾げる。

ものの数秒で何かを書き終え、紙を少女に渡した。紙には4文字の漢字が書かれている。

「これ・・・」

「もうすぐ孤児院の人間が迎えにくる。十数年後にまた会おう。今井碧子」

そして十四年後、二人は再会を果たした。

第四章 血は新たな血を・・・1

ぼつぼつと雨が降り始めていた。通り雨ではなさそうだ。これから本格的に降ってくるだろう。

「じ・・・じゃあ何か？」

達也は動揺している。できるだけ平常心を保とうとしているものの、上手くいっていない。今まで動揺する機会があまりなかったからかもしれない。

混乱した頭をフル回転させ、言葉を捻りだそうとする。しばらくの間を置き、ようやく聞くべきことを思い出す。

「お前の・・・今井碧子と言う名は、親父がつけたって言うのか？」
彼女は穏やかな表情で頷く。どこか誇らしげで、そして悲しげでもある。しかし、達也に彼女の複雑な心境を読み取る余裕はない。

どうして刑事になったのかと言う問いだった。その答えは、正義と約束したから、だ。あの親父・・・まさか碧子の名付け親だったとは。しかも己の目指すものために、他人の未来に影響を与えるなど言語道断だ。

碧子も碧子である。四歳の頃の約束をずっと覚えていただけなく、それを未成年で果たすとは。できるか、普通。少なくとも、一般の人なら忘れているだろうし、約束を果たすこともできなかっただろう。

「孤児院に帰ってから、毎日毎日必死で勉強したわ。警察官に体力がいることもわかっていたから、運動も欠かさなかった」

正義との約束を果たすため、来る日も来る日も勉強にはげみ、体を鍛えきた。目標のある日々は、天才少女の能力をさらに輝かせた。類い稀な才能とこの上ない努力が、未成年での国家試験合格と言う快挙へ導いたのだ。

「ある日、あの人が警視総監になったニュースを見て、私はさらに燃えた。一刻も早く彼の力になりたいくて、若輩なりに万全をきして

国家試験が行われる場所に行ったの。そしたら、会場の前で、一人の男の子が警備員と喧嘩してた」

・・・。

「だから言ってるだろ！試験を受けにきたんだ、入れてくれよ！」
「子供に何とかできるほど、簡単な試験ではない。すぐに帰りなさい」

大声で叫び続ける少年に対し、頑なに入場を拒む警備員。その様子を、碧子は黙って見ていた。

自分以外に、未成年で国家試験を受けようとする人がいるとは思わなかった。あの少年は、どれほどの力を持っているのだろうか。頭で考えるより先に、体が動くタイプのように思えるが・・・。
何にせよ、この状況で自分が入ろうとしても、あの少年のように止められてしまうのがオチだろう。よく考えてみると当然である。警察と言う公務員になるための試験を、未成年者に受けさせてくれるわけがないのだ。

あと数年・・・大人になるまで知恵を蓄えるべきかもしれない。そう思ったときだった。

「どうした、何かあったのか？」

いつまでも叫び続ける少年の声が気になったのか、もう一人の警察官が試験会場から出てきた。少年を相手にしている警察官よりも、装飾の多い制服である。あの人はまさか・・・。

かなり前から喧嘩していたのだろう。警官は半ばあきれ気味であった。しかし、少年を見て表情が一変する。碧子のそれも同様であった。

少し老けているが、見間違えるはずがない。

「神崎さん！」

彼の名を叫び、走りだす。どう呼べばいいか悩んでいた。十数年前にあつたとき、一度も彼を名前で呼ばなかった。その時もどうしていいかわからず、ねえ、で済ましていた。

当時は幼かつたのでしかたなかった。しかし、今や警視總監になった彼に対し、ねえでは失礼だ。考え抜いた末に、神崎さんと言うありきたりなパターンとなった。

彼は覚えているだろうか。十年以上も前に、数時間だけしか一緒にいなかった自分を……。どうか、記憶に残っていますように。

彼女の声に反応し、少年に向けていた顔を上げる。そしてすぐに、彼女を視界に捉えた。

「……！」

「覚えて……いますか？」

目の前で立ち止まり、彼を見つめる。その表情からは、まさか・・・と言った驚きが見てとれる。しかしそれも一瞬のことで、彼はすぐ、彼女に手を差し伸べた。

「碧子か。間違えたぞ」

覚えていた。思い出そうとすることもなく、瞬時に碧子であると判断した。彼女の名が、常に頭のなかにあつた証拠である。

忘れてなどいなかった。碧子が約束を果たすため、勉学に励んでいる間、正義も彼女との約束を果たすため、一心不乱に上へ昇り続けたのだ。警視總監・・・今井碧子・・・正義の悲願である警察革命の、すべての準備が整った。

しかし、それで納得する正義ではない。

「あの・・・取り込み中のところ悪いんだけどさ」

感動の再開に、先程まで警官と喧嘩していた、少年が割り込んだ。茶髪の少年・・・この人物は何故、国家試験を受けようとしたのだろうか。普通なら常識にしたがつて、一定の年令になるまで待つところである。相応しい時期を無視し、この年令で試験を受けようとする理由はないはずだ。

碧子と同じような事情でもないかぎりは。

「そうだ、紹介しておこう。彼は倉坂栄司。君と同様、未成年で試験を受ける」

ここにきたという事は、試験を受けるということである。それが読めないほど、正義は抜けていない。

倉坂栄司・・・碧子と正義が会ってから十数年の間に正義が見つけた、もう一人の逸材。

「あんたが今井碧子か。オッサンから話は聞いてるぜ。まあ、よろしく頼むわ」

『お・・・オッサン！？』

それが正義を示す言葉であることはすぐにわかった。しかし、仮にも刑事を目指している者が、警視總監に対してオッサンとは・・・。

試験を受けるということは、相応の実力があるのだろうが、彼の態度が災いして、全く聡明に見えない。典型的な馬鹿にしか思えないのだ。

「積もる話があるみたいだから、俺はさきに行ってるぜ。じゃ」

さつと手を挙げ、少年は試験会場へ入っていった。

「ああ言う性格だが、能力はある。君と彼が揃えば、警察の革命に抜かりはないだろう」

「はあ・・・」

正義は保険を用意していた。一人では足りない。二人でも足りないかもしれない。ならば三人だ。警察の革命に妥協はいらない。貪欲に、人材を集める必要があったのだ。

警察は巨大な組織だ。底辺から頂点まで、数えきれないほどの人間がいる。正義の思想に賛同する者もいれば、反対する者もいる。同じ意見を持たぬ者達も率いて、全てを変えなければならないのだ。それがどれほど困難なことなのか、わからない者はいないだろう。我こそは警察を率いるに相応しい。それを証明するためには、まず優秀な人材が必要になる。それだけの人材をまとめ上げている。その事実が、周りの者達に影響を与えるのだ。

「よくぞ来てくれた。お前と栄司が協力すれば、警察の新たな道が開けるだろう」

「は・・・はい。では、行ってきます！」

国家試験が始まった。今井碧子と倉坂栄司・・・二人の未成年国家試験合格は、警察界を揺るがすこととなった。

栄司か・・・あいつも碧子と互角の力を持っていたのだな。定期考査などではさした点数を出していなかったが、あれは手加減していたのか。あまりに高い点数を出しすぎると、怪しく思われると感じたのだろう。が、出したら出したで栄司は一躍人気者になっていた。あいつも高校生の年令なのだから、それなりに楽しんでよかったはずだ。

まあ、紅水冥との計画で、それどころではなかったのだろうが。

「彼は警察官になってすぐ、初めての仕事を命じられたわ。何かわかるわよね？」

達也を影で見張り、何かあれば護衛する。正義が私情全開で命じた仕事である。

栄司のことも考えた上でのことだろうが、警察に革命を起こそうとしている人間のやることではない。警察の重鎮から相当叩かれた事だろう。

「あれには私も反対したんだけど、結局聞き入れてくれなくて・・・」

頑固な男だ。一度決めたことを曲げることはそうない。

「母さんが死んでから、仕事への執着が増した。親父は今特急電車の状態・・・止めるというほうが無理だ」

葬式で、彼は心に誓った。仕事に生きると。妻の死を振り返らないことで、彼女が心配しないようになると思ったのだろう。不器用な彼ができる、数少ない気遣いの一つだった。

幼かった達也は正義の胸中を察することができず、拗ねてしまっ

たのか、世の中に光を見出だせない人生を送ることになった。非社会的と言つ以外に表現の見つからない少年は、母親の死をきっかけとして変わってしまったのだ。

「そうなのよね・・・奥さんがいたのよね」

「・・・？」

この言葉が何を示すか、わからない者は少ないはずだ。

何故警察に入ったのかと言う問い。どうやらその答えは、単純に約束だったからと言うわけではないらしい。鈍い達也は、それに気が付かないでいる。

「刑事になつてすぐ、あなたのことを聞いたわ。正直ショックだった。今までの努力が、全て突き崩されたような気がした」

碧子が聞かされた、達也と妻の存在。彼女にとって、それは最悪の告白だった。それまでの苦悩は、ただ約束を守るために味わったのではない。十数年耐えてきた努力は、最悪の形で裏切られたのだ。

「お喋りがすぎたわね。さ、早くあの二人を捜し出しましょう」

「碧子・・・お前」

空から視線を戻した碧子の目は、悲しみに満ちていた。

「女の心つて、意外と深いのよ」

全てを察した達也は、しばらくその場に立ち尽くした。

扉を強く叩く。家の扉は木製で、思い切り叩くとヒビが入りそうになる。今時木製なんてありかよ。田舎じゃあるまいし・・・俺の勘違いか？鉄製よか軽いし、趣もあるような気がするけど、やっぱり古い感じがするなあ。全国の玄関が木製の家にお住まいの方、すみません。

数時間前、いきなり街から人影が消えた。テレビを見てなかったからよくわかんねえけど、どうもオッサンが引きこもり勧告を出したらしい。外で孤立した俺たちを捕まえようって魂胆だろ。さすがオッサン。頭の働き方が違うぜ。

それでどつかの家に匿ってもらおうと思って、こうやって誰かさんの家を訪ねて回ってるわけだ。

「ここもダメか・・・仕方ない。次の家にいこう」

「警察はもう動いているはずよ。このままじゃ・・・」

冥は焦っている。二人で逃亡したまではよかったが、まさかこのような策を正義が考えていたとは思わなかった。静まり返った街、誰もいない道・・・これほど静かな時間を過ごしたことはしばらくなかった。しかし、ゆったりとした時間に浸っているわけには行かない。栄司と冥には余裕がないのだ。

諦めて家を訪ねようと思い、歩きだそうとした。しかし、誰かに腕を掴まれ、足を踏みだせなかった。

「おわつと、危ないじゃねえ・・・か・・・」

怒鳴ろうとしたが、すぐに勢いを失った。不機嫌そうに振り返ると、七十から八十ぐらいの老婆が立っていて、栄司の腕を掴んでいたのだ。

先程の家から出てきたようだ。その証拠に、木製の扉が開いていた。

「あ・・・と、突然すみません。警察の勧告を見損ねて、外に取り残されてしまったんです。鍵もどこかに落としてしまって・・・申し訳ありませんが、しばらくおいてくれませんか？外にいますと、犯人扱いされてしまうかもしれないので・・・」

考え得る言葉を重ね、何とか入れてくれないかと懇願する。

栄司自身、丁寧な言葉遣いができないわけではない。必要なときには敬語も使う。しかし、普段からそうしていることは、栄司にとつては息苦しい。人生の大半を素で生きていたい。そう思い、丁寧な態度を取ってこなかった。正義をオッサンと呼ぶのも、そんな思いがあるからである。本当は心から尊敬している。だからこそ・・・。「それは大変ねえ。どうぞお入りになつて」

老婆は快く受け入れてくれた。すみませんと言いながら、老婆の家にいる。なかも木できており、この時代に珍しい純粋な和風の

家だった。

畳の上を歩き、居間へ案内される。

「お茶を入れてきますので、少し待っててくださいな」

「あ、どうぞお構いなく」

そう言ったが、老婆は台所に行ってしまった。気のせいだろうか。何だかうれしそうである。

栄司は部屋を見渡す。落ち着いた雰囲気、何となく心地いい。冥はと言うと、心底ホッとしたのか、胸を撫で下ろしている。

「はぁ・・・一時はどうなるかと思ったわ」

「そうだな。まあ、しばらくここで時間を潰そう」

二人が外にいないことに気付くまで、少し時間がかかるだろう。それまで、この家で過ごすことにした。

第四章 血は新たな血を・・・2

これまで何人の人間を黄泉よみに送ってきたのだろうか・・・あの計画のために奪ってきた命の数は、俺だけでも十は軽く超える。冥の分を合わせると、三十人ぐらいいくはずだ。これを高速道路で起こそうと思えば、超スピードで走っているときに急ブレーキすれば後は後続の誰かさんが次々と衝突してくれる。要するに、大事故で死んでしまう人数と、俺たちが殺した数は、大体同じになるってことだ。当然事故の度合いにもよるし、仮に大事故になっても、多くの人が生き残ってくれば、それに越したことはないけどな。

ともあれ俺たちは、一回でも許されない殺人を、ある計画のためと言ふ不純な理由で繰り返しているわけだ。参ったねえ、俺たちは超凶悪犯罪者だぜ。覚悟はしていたけどな。

二人が老婆の家に入れてもらってしばらく経つ。そろそろ警察も気付き始めるだろう。しかし、焦る必要はない。この辺りにも家はたくさんあるのだから、あまり急いで出ていっても返って怪しいだけだろう。

そう自分を落ち着かせ、もう一度部屋を見渡す栄司。すると、さつきも見つけた若い男性の写真が目に入った。遺影である。この老婆の親族なのだろうが、若くして亡くなってしまったものだ。あの写真から察するに、享年二十代前半だろう。

「？ どうしたの栄司・・・あつ！」

栄司と同じ場所に目をやる冥。その瞬間、彼女は言葉を失った。目が恐怖に満ち、体がカタカタ震えている。

ここにいては危ない。一刻も早く逃げなければならない。あの遺影に写っているのは・・・あの人は・・・！冥は栄司に警告しようとしたが、恐怖のあまりそれだできなかった。冥の異変に気付く事無く、栄司は老婆に問うてしまう。

「息子さん・・・ですか？」

「いいえ、孫です。年寄りを労ってくれるいい子だったんですけど、ほんの数週間前に殺害されてしまって・・・」

数週間前に・・・？妙だな。この一カ月、殺害事件のニュースなんて流れていなかったはずだ。目立ったものといえば、冥の脱走や、今日の勧告みたいなものだ。俺たちが起こした事件以外は。しかし、彼のような人物を殺した記憶はないし、冥だって・・・っ！

「冥、お前まさか・・・」

「栄司・・・逃げよう。だってあの人・・・」

間違いない。栄司は確信した。となれば、冥の言う通り一刻も早く逃げなければならない。この老婆は、孫がやられたことをやり返すつもりだ。

「いい子だった・・・他に言い様がないくらい。頭が良くて、けど決して慢らず、努力を惜しまなかった。人当たりも良くて、非の打ち所がなかった。彼ならきっと幸せな人生を送れる・・・そう、信じていたのに・・・」

老婆がゆらりと立ち上がる。痩せ細ったその手には、果物ナイフが握られている。老婆にはわかっていた。最愛の孫を殺したのが、未成年連続通り魔だと言うことを。

そして警察から勧告が出された今、犯人でありうるのは外から訪ねてきた彼らしかいないという事を・・・！

「あなた達にあの子が味わったのと同じ苦しみを味合わせてあげる。警察に突き出したりしない。今ここで、あなた達を葬ってやるんだからあつ！」

耳に響く声を上げ、狂ったように果物ナイフを振り回す。この狭い居間ではすぐに後がなくなってしまう。

どこかに逃げ道は・・・あることを祈って後ろを見ると、大きな窓があった。ガラス製ではない。これなら破って逃げられる。

「冥、こつちだ！」

障子を蹴飛ばして外へ出る。しかし、その先でも恐怖が待っていた。

数えきれないほどの人が、二人を囲むようにして立っている。年寄りから若者まで年令は様々だ。そしてそれぞれが、手に凶器を持っている。

この者達は恐らく、二人に殺された人の遺族だ。さっき茶を入れてくるとき、老婆が連絡したのだろう。背筋が凍りそうなほど、強烈な殺気を感じる。

「へっ、お熱い歓迎に感謝しねえとな」

前にも後ろにも、右にも左にも、二人に復讐せんと集まった者達。このままでは間違いなく殺される。この者達にはもう、二人を警察に突き出すと言う発想は残っていないのだ。

彼らの言い分もわかるが、黙って殺されるわけには行かない。できれば使いたくなかったが仕方ない……。栄司はポケットの中にあるものを握り締めた。

ガウンッ！

突如、捜査本部の電話が鳴り響いた。捜査中にあった異変は、全て本部に連絡することになっている。何かあったな……と言う確信を持ちつつも、正義は受話器をとった。

「私だ。碧子か、何かあった？」

もはや何かがあったことは確定している。何もないのにこの電話が鳴ることはありえないからだ。

できれば、この電話が鳴るのは二人を捕まえた時だけであってほしかった。しかし、そんなにうまく行くほど、事態は優しくない。

「先程銃声が聞こえました。恐らく、あの二人のどちらかが発砲したのだと思われます！」

「何だと！？」

正義は驚愕すると同時に、危機感を覚えた。彼らが銃を使ったということは、銃を使う相手がいたと言うことだ。あの二人が仲間割れするとは思えない。となれば、相手は一般人か。

もしこれ以上死者が出れば、逮捕できるできないに関係なく、正義は失脚せざるを得なくなる。そうなれば、警察の革命どころではなくなってしまう。

「すぐに銃声のした方へ向かえ！怪我人がいるなら、救急車の手配。随時報告を怠るな！」

「は・・・はい！」

電話が壊れてしまいそうな勢いで受話器を置く。落ち着け・・・私が慌てては部下達も慌ててしまう。これ以上被害を出さぬよう、冷静に事を運ぶのだ。

追い込まれた表情の正義を見て、重鎮達は思った。彼もおしまいだな・・・と。

銃声のした方へ走る。あの音を聞いたのは俺たちだけではないはずだ。何人もの刑事が向かっているとすれば、栄司も終わりだな。何があつたのかは知らないが、銃を使ったのは失敗だ。自分の居場所を知らせることになるのだからな。

しかし、あいつがそう簡単にミスを犯すとも思えない。何かの作戦か、あるいは銃を使わなければならない状況に追い込まれたか・・・。いずれにせよ、俺は奴を逮捕すればいい。怪我人がいれば話は別だが。

「急いだ方がいいわ。彼、殺されるかもしれない！」

碧子の表情からは、達也が感じている焦りとは別種のものが見て取れる。栄司の命が危ない。かなり切羽詰まった感じがする。

「彼らが殺してきた人は相当なものよ。となれば当然、二人を恨む人もたくさんいる。もしその人たちが、彼らに復讐しようとしているとしたら・・・」

「・・・！」

確かに、愛する者を亡くして、警察に任せようと思う者が全てとは限らない。殺人を実行した者に、自ら罰してやろうと思う者達も

いるかもしれない。今のように、犯人を判断しやすい状況なら尚更だ。

甘く見ていた。遺族の怨恨は、警察が全力を尽くす程度で抑えられるものではないのだ。信用を失った警察が、遺族にとつて頼りになる存在であるはずもない。自ら動かなければならないと決心した者がいるとすれば・・・。

『栄司・・・！』

あいつに死なれるわけには行かない。まだ決着がついていない上、逮捕できずに死んでしまったとなれば、親父の悲願が達成できなくなる。

いや、嘘を吐くのはよそう。あいつに死んでほしくない。仕事であれ何であれ、一度繋いだ友情を、どこの誰かもわからない奴に切られるのは御免だ。

「・・・！」

人が倒れている。女の子だ。待て・・・まさか・・・そんな馬鹿なっ！なぜそこで・・・。

「何故だ、紅水！」

倒れていたのは紅水冥だった。残酷である。胸に斬られた跡がある。それだけではない。冥の体中、足に腕に腹・・・更には目まで、至る所が刃物で斬られ、刺されている。あまりにグロテスクな状態に、直視することも難しい。

何だこの酷さは・・・。死神でも現れて、刑に処されたようだ。間違いない世界にあるどんな刑よりもひどい。何故そう言えるか。それはこの状態であるにも関わらず・・・。

「紅水さん、しっかりして！」

冥が生きているからだ。

「碧子、すぐに親父に連絡しろ。早く！」

この状態では、今から救急車を呼んでも助からないだろう。なんてことをするんだ。徹底的に苦しめた上、さらに生き地獄を味合わせるとは・・・。

「あ・・・ああ・・・」

「どうした、言いたいことがあるなら言え。伝えてやる」

こうしている間にも、冥の体からは大量の血が流れている。傷口がありすぎて、どこを抑えていいのかもわからない。どうにもできない自分に腹が立つ。あいつの愛している少女を助けることもできないとは・・・。

「栄司・・・を・・・」

「ああ、わかつている。心配するな!」

なんと健気な少女なのだろうか。こんな状態になっても、まだ愛する者のことを想えるとは・・・体を走る激痛で、そんな余裕はないだろうに。

栄司・・・お前はどこへ行っただ! 恋人が死にかけているんだぞ・・・!

「ああ・・・」

見るも無残な顔で、冥が微笑んだ。潰された目で、彼女は何を見ているのだろうか。

「・・・栄司・・・今そっち・・・に・・・」

その瞬間、わずかに残っていた力が抜け、冥は黄泉へと旅立った。
「・・・くそっ!」

「あ、ちよつとどこに行くの!？」

碧子の声を見無視し、達也は走った。

冥はうまく逃げ切ったか? まさかやられちゃいないよな。

にしても、遺族達がこんな行動に出るとは思ってなかった。計算外だ。このままやられるわけには行かない。一体何のために、俺は警察を離れたんだ・・・! 絶対に生きてやる!

栄司の後ろには、未だ殺気を帯びた遺族達が刃物片手に、走るわけでもなく、ゾンビのように追ってきている。その様子がより恐怖を増大させた。

「ホラー映画じゃねえんだ・・・うわっ！」

その時、突然腕を掴まれ、栄司は裏路地に引きずり込まれた。

「静かにしろ。奴らに切り刻まれたいのか」

「！ 神崎・・・」

栄司の腕を掴んだのは達也だった。本来なら腕をへし折って逃げるところだが、そんなことをやっている場合ではない。

「どうしたんだよ。こんな危ない状態のところに乱入しやがって」

冗談めかして言うが、達也の表情はかたいままである。

「いいかよく聞け。紅水冥が死んだ」

その瞬間、栄司の表情から余裕が消えた。冥が死んだ。めいが死んだ。めいがしんだ。メイガしんだ。メイガシンダ。

「これ以上ない最悪な惨殺だった。あいつらの仕業だろ？」

あいつら・・・後ろから追ってくる、復讐に燃えるゾンビ。ナイフに斧に鎌にハンマー。正気の沙汰とは思えない。奴らはもう人ではないと言っても過言ではないだろう。

だが、人を人でなくしたのは栄司であり、今の警察である。何の結果も期待できなくなった組織と、例を見ない凶悪な犯罪者。最悪な状態のところに、最悪な犯罪。被害者の恨みが形になってしまったのだろう。

「お前・・・さっき誰か殺したか？」

「いや、やってねえよ。威嚇するために、空に向かって撃つただけだ。数が多かったから、二手に分かれて逃げただけで、失敗だったな」

やれやれと、空を見上げる栄司。泣きたいだろう。しかし、栄司も警察の端くれ。泣いても無駄だということはわかっている。

「栄司、今すぐ捜査本部へ戻れ。そうしなければ、今度はお前の命が危ない」

彼らの恨みは本物だ。その証拠に、紅水冥が殺されている。そして今、栄司を殺すために凶器を持った者達が迫ってきている。

栄司の命を守るためには、彼を逮捕し、捜査本部へ連れていくの

が一番だ。警察と一緒にいるとなれば、奴らも諦めざるを得ないだろう。

「そうだな。それもいいな」

栄司からはまったく気力が感じられない。冥を失って、全て抜けてしまったのだろうか。

「お前、そもそもどうしてこんなことを・・・」

「言い訳っぽくなりそうだからあまり言いたくないけど、事情聴取ってことにしたとか。簡単なこった。オッサンの警察革命を、確実なもんにしたかったんだよ」

栄司の計画は、彼が正義に出会ったときに始まった。

終章

男がいた。男は幼い頃から強い正義感を持ち、正義が悪となる社会を嘆いていた。男は警察官になった。いつか、正義が正義として認められる社会を作るために。正義主義国日本。それが男の夢だった。以下の文を読んでほしい。

正義≡悪。それが現在の社会で成り立っている方程式である。しかし、そうではないと思う。正義が悪と見なされるのは、今の社会が正義を蔑むかのように形成されていて、大半の人がそれに甘んじているからで、全ての原因となっているのが日本国憲法であり、法律である。現在の憲法は国際平和的バランスに優れており、故に日本は戦争によって底辺まで落ちた国際的立場を、現在の位置まであげることに成功した。が、それが結果的に、正義≡悪の方程式を成立させてしまっている。正義とは非常に難しいもので、人によって形もやり方も変わる。

例えば、誰かがいじめられているとしよう。それに気付いたある人が、正義の名の元になどと言いながらいじめていた人間を殺してしまった。これはもう犯罪でしかない。少しでもやりすぎてしまうと、正義は正義でなくなってしまうのだ。行動範囲が狭い上、一人一人基準が違う思想・・・それが正義である。この反則気味な難しさを誇る思想の実現に向けて、頑張らなくてはならないと思う。

男が小学校の頃に書いた、未来の目標と言うテーマの作文である。そもそも正義とは、決して夢の世界でのみ存在できるものではない。幼くして現実を見据える力を持っていた男。しかし、正義を捨てることは絶対になかった。如何なるときも正義の名の元に、限度を超えないよう動いてきた。その結果、男の正義は周りにも認められ、警察官と言う職につくことが、最も正義を果たしやすい場であると知った。その時、男は中学生だった。

彼は警察官になるにあたって、ある問題に気付く。その時すでに、

積み重なる不正行為によって、警察は信用を失いつつあった。男が警官になる頃には、一般人は警察を信じなくなっているだろう。それでは正義のために働けない。男は迷った。

迷ったまま高校生になった男は、ある警察官と出会う。警官は男の思想に賛成し、警察の実情を彼に話した。

元より警察は、正義の組織などではない。警官は報酬をもらうために、犯罪者を捕えているだけだ。警察に勤務する者達は全員、それぞれの家庭を安定させるために、罪を犯した者達を非情に捕えていく。故に、無罪である人物を誤って捕えてしまうこともある。元から方向性の違う警察と言う組織を、正義の組織にしようと思えばどうすればいいか。答えは簡単、革命を起こせばいい。

警察革命に必要な条件は三つ。一つ、革命を起こす人物が警視總監であること。一つ、革命に必要な、優秀な人材を集めておくこと。そして、警視總監に就任してから、一度も問題を起こさないこと。これらの条件を全てクリアすれば、警察革命も夢ではない。

以後、男は警察の革命に向け、ひたすら勉強に励む。派出所で働くような警官になるつもりだったが、それではどうあがいても警視總監になることができない。受ける試験を変え、警察の頂点に立つための道を歩むことにしたのだ。

その過程で、男は一人目の逸材と出会い、警察革命の約束を交わす。男と少年が出会ったのは、それから数年後のことである。

少年は小学生だった。学校側が名を馳せてきた男に講演を依頼したことから、二人は顔を会わせることになる。

講演を行う男に、少年は他の者とは違うものを感じた。天才同士、親近感を覚える何かがあったのかもしれない。

講演が終了すると、少年はすぐに男に会いに行った。少年を見て、男も彼の才能に気付いたという。

男は話した。自分の志のこと、それを成し遂げることを、ある少女と約束したこと。それを聞いた少年は、自分も革命に参加することを望んだ。人材を集めていた男は、それを承諾した。

その時すでに、少年は気付いていた。仮に自分が参加したとしても、革命が成功する可能性が低いことに。少年は数年間解決策を考え続け、ついに思いついたのだ。事故犠牲の計画を。

中学生になった少年は、一人の少女と出会う。天才同士としては珍しく馬が合い、二人は交際するまでに至る。

ある日、互いの将来について語り合ったとき、少年は初めて、男との約束と、革命を確実にするための計画を他人に話した。その計画の悲惨さに、少女は思い止まるように説得した。しかし少年の意志は堅く、どうあっても諦めてくれそうになかった。

そこで少女は、ある提案をした。自分もその計画に協力すると。少年は猛反対した。しかし今度は少女が引かず、結局二人で計画を実行することになったのである。

「オッサンに会ってからずっと、少しでも革命が成功する確率を上げようと考えてた。いくら準備が整っても、組織の性質を変えるのは容易じゃねえからな。まあ、結局は突き崩すことになっちまったけど・・・」

雨は依然として降り続けている。勢いを増した雨は、どこかへと流れると同時に冥の血まで洗い流してしまう。彼女や栄司の心に染み付いた血も流してくれるのだろうか。

栄司が冥の惨殺される場面に居合わせなくてよかったと思う。もし二手にわかれていなければ、彼まで殺されてしまい、事件が最悪の結果を迎えてしまっただろう。栄司は今後、一生悔やみ続けることを義務付けられてしまったが、双方が殺されてしまうよりも遙かにましである。無礼な言い方かもしれない。しかし、そう言う他にないのだ。

栄司は革命実現のために冥を巻き込み、何度も殺人事件を起こした。結果、被害者の遺族に復讐され、栄司ではなく冥が犠牲になった。遺族達にはどちらが主犯なのかを見極める力はない。二人が犯

人だと判断したら、がむしゃらに襲い掛かるしかないのだ。そして今も、彼らは復讐のために後ろからゆっくりと迫ってきている。

疑問が残る。遺族のことに關しては想定できなくても仕方ないかもしれない。しかし、なぜ連続殺人を起こすことが、警察革命の成功率の上昇に繋がるのか。

「わかつてると思うけど、今の警察は不正行為という形で一般人を何度も裏切った。それによつて国民は警察を信用しなくなった。信用を崩すのは簡単だが、一度崩れた信用を回復するのは至難の業だ。今から地道に回復させていったら、マイナスが0になるまで百年かかる。かと言つて、強引に革命を起こしたら、国民の理解を得るまでこれまた百年かかる。オッサンが警視總監でいられる間に信用を回復し、かつ理解を得なきゃならなかったんだ。それにはどうすればいいか。俺はあることを思いついた。言わなくてもわかるよな？」
もちろんわかる。栄司は話を続ける。

「わりと勘違いされがちだけど、警察は事件を起こさせたいための組織じゃない。起きた事件を解決し、犯罪者を捕える。それが警察だ。つまり、元々の使命をこなせば、信用は回復できる。それができない事件なら尚更だ」

要するに、大きな事件を起こして、適度なタイミングで解決することで、本来よりも何倍も早く、警察の信用を回復させることが出来るという事だ。正義が警視總監でいられる間に、革命を起こせるレベルまで人々に信用されなければならなかった。そのためには、これ以外に方法がなかったのだ。

自らが犠牲になることで、革命を確実なものにする。それが自分出来ることの限度だと思つていた。

「ところが、それすら成す事が出来なかった。自分の限界だと思つていたことさえ、俺には出来なかったんだ」

「・・・・・・・・」

言つまでもないことだが、栄司は天才と呼ばれる者達のなかでもとりわけ光る才能を持っている。それは碧子も同様である。そんな

彼でさえ、自分が殺した者の遺族の感情を計算することは出来なかった。それによって、全ての計画が崩壊してしまった。

良かれと思っていたことが、結果的に正義や碧子、そして警察全体の足を引っ張ることになってしまった。正義が志した警察の未来は、脆くも崩れ去ってしまったのである。

「まあ、俺も大した人間じゃなかったってことだ」

正義、碧子、冥、栄司・・・直接的であれ間接的であれ、彼ら天才が協力して造り上げようとした誠の組織。それが叶うことはないのだろう。冥は死に、栄司も警察に居続けることは出来ないだろう。集結した天才達が、その力を発揮することはなかった。いや、天才達であつたからこそ、それぞれの意志が強すぎて、互いの力が反発し、共鳴出来なかったのかも知れない。

「栄司、とにかく捜査本部へ戻ろう。お前には、まだやるべきことがあるはずだ」

これまで犯した罪・・・それは公平な裁判の元、償わなければならない。それすら出来なくなった人の分まで・・・だ。

「わかつてるって。じゃ、連れていってくれよ、刑事さ・・・っ！」
いつものニヤついた栄司の表情が歪んだ。ガクガクと震えながら、彼は痛みの走る腹に視線を落とす。

達也が栄司の視線を追うと、栄司の腹を貫いて、真っ赤に染まった刃物の先が怪しく光り、その後ろでは、老婆が刃物で栄司を刺している。この状況を把握するまでに、少し間が空いた。その間にも、栄司の服が血に侵食されていく。

「参った・・・な・・・」

呟き、糸の切れた操り人形のように、栄司がその場に崩れ落ちる。「栄司！」

事情聴取に時間をかけすぎた。二人のすぐ後ろには、復讐心に満ちた遺族達が囲むようにして立っていたのだ。

まだ終わりはしない。まだ・・・復讐は終わっていない！そう語るかのように、遺族達は各々の武器を振り上げた。

ガウンツ！

銃声が響き、遺族達の動きが止まる。ただ一人、先ほど栄司を刺した老婆だけが、武器を握ったまま倒れた。

「武器を持つ者全員に告ぐ。直ちに武器を捨て、こちらに降りなさい。発砲許可は出ている。反抗し次第、射殺です」

遺族達が後ろに振り返る。その先では、栄司達を追っていた刑事達が、彼らを包囲していた。全員が銃を構えている。反抗し次第、射殺。つまり、この老婆のようになるということだ。

武器を捨てた者から順に、刑事達が逮捕していく。もちろん、紅水冥殺人容疑で・・・だ。

「達也くん、無事！？」

碧子が心配そうな顔で駆け寄ってくる。彼女が他の刑事と合流し、ここにきてくれたのだろう。

「俺は何ともない。それよりも、栄司が・・・」

止血しようとはしている。しかし、止まらないのだ。栄司への罰とでも言うかのように、血は無情に流れていく。

無理か……。刺された部位が悪かったのか、出血量が普通ではない。このままでは出血多量で・・・。

「悪いな神崎。ここで死ねてこと・・・らしい」

「冗談じゃない！冥と会うにはまだ早いだろ！」

栄司からは、生きることへの執着心が全く感じられない。絶対に生きてやると言う意志がない。

一応遺族達から逃げてはいたが、その時すでに、栄司は諦めていたのかもしれない。自分の命はここまでだ・・・と。達也に冥の死を聞いて、彼は生きることの意味を完全に失ったのだろう。冥がいたからこそ、彼は遺族達から逃げていたのだ。

「オッサンに・・・謝つといてくれよ。余計なことをして・・・悪かったって・・・な」

「栄司・・・！」

何だろう・・・血が流れて、体温は下がっているはずなのに・・・

暖かい。冥、ひどい目に遭わせて悪かったな。今、謝りにいく……
ぜ。

栄司の全身から、力が消えた。

また電話が鳴る。報告の電話だ。栄司は助かったのか……。私はその結果を知らなければならない。電話に出ることが、これほど恐いと思ったことはなかった。

「……私だ」

「今井です。連続殺人犯倉坂栄司と、同容疑に加え、刑務所脱走の容疑にかけられていた紅水冥。両名の死亡を確認しました」

だめだったか……。本当に死ぬべきなのは私だというのに……。若い者達が先に旅立ってしまった。

元はと言えば、栄司を警察に入れたのは私だ。彼と碧子がいれば、警察に革命を起こせると……。私が彼の才能を見出ださなければ、栄司自身はもちろん、紅水冥も若くして死することはなかった。自分の志を遂げるために、他人を犠牲にして言い訳がない。私はここへきて、自分の正義の甘さに気付かされてしまったのだ。

バンッ！

机を思い切り殴る。こんなものではない。彼らの味わった苦痛は、こんなものでは……。

「最悪の……結果だ」

数日後、警視庁は記者会見を開いた。

「本日、この会見で皆様に伝えるべきことは、二つあります」

マイクを握り、正義まさよしが集まった記者達に語り掛ける。記者会見は捜査本部の置かれていた警察署の一室で行われている。前には正義や重鎮達が座り、記者達から見て左の壁には碧子が、右の壁には達也が立っている。

「まず、未成年死刑囚、紅水冥の脱走から始まった一連の事件から。紅水冥はかねてより、倉坂栄司刑事と恋人同士の関係にあり、彼らの間で脱走、逃走の計画を練っていました」

聞いてわかる通り、具体的な真実は隠されている。真実の中には、語らなくていい語ってはいけないものもある。今回の事件は、それに当たるのだ。

この事件の真実は、それを知る数名の者達がそれぞれの胸にしまっておくべきものである。

「二人は計画どおり、行動。それに対し、我々は危険と思われる地域に厳戒令を出し、彼らの逮捕へ向けて、行動を開始。結果、倉坂栄司、紅水冥両名の死亡という最悪の形で、事件は解決しました」

二人を殺害した遺族達は逮捕され、裁判によって罰を受けることになっている。様々な人間の感情が入り乱れたこの事件は、どう言う形であれ、終焉を迎えたのである。

しかし、記者達が気にしているのはそれではない。

「神崎総監、この大失態における責任は、どのように取るつもりですか？」

「無論、私が警視総監を辞任する・・・と言う形になります」

それ以外になかった。腹の黒い政治家であれば、自分の給与を削減するなどの方法で済ますだろうが、正義感の強い正義がそれで納得するはずもない。

彼が辞める事によって、達也や碧子を警察に留める事ができる。

未来への種が残すことで、正義の意志が途絶えないようにしたのだ。

「二つ目の用件、それは私が辞任した後、警視総監に就任する者を皆様にお知らせすることです」

椅子から立ち上がり、一点に目を向ける正義。その先にいるのは、
。。。

「紹介しましょう。次期警視総監、今井碧子刑事です」

「・・・え？」

バツと記者達の視線が一気に集中する。正義の指名した新たな警

視総監は今井碧子、十七歳。突然の指名に驚いたのは記者だけではない。警視庁の重鎮や達也もさることながら、誰よりも碧子が驚いていた。

未成年で刑事になっているだけでも、事情を知る者達からは問題視されているというのに、警察の指揮を執るとなっては社会的問題になりかねない。

「今井刑事、こっちへ」

「あ・・・はい」

何か言えなければならなかったが、結局言い様がなく、戸惑ったまま前へ行く。彼女の動きを追って、見ている者達の目が動く。『親父・・・正気か？』

達也には正義の考えていることが理解できない。碧子や達也の存在を、警察のお偉いさん達がどう思っているかは言うまでもない。自分を認めていない人間の中に放り込まれたら、これでもかと言うほどにたたかれてしまう。それがわからないほど、正義は馬鹿ではないはずだ。これ以上、彼女に苦勞をかけてどうする気なのか。

達也の思う限りでは、正義は碧子の想いに気付いていない。相手の心情に感付くことなく、自分はただ期待する。それが碧子にとつてどれだけ辛いことか・・・。

「あ、あの総監・・・」

さすがにこれはまずい。警察は日本全国に存在する巨大な組織だ。それを未成年者が統括するなど、許されるわけがない。

この記者会見は中継されている。これを見た国民達がどう思うか。「心配はいらない。今は反対していても、お前なら国民を納得させることができる。私は結局、警察革命を実現させることができる。ままだ警察を去る。しかしお前達なら、私の思い描いたものとは違う警察を造り上げることができるだろう。そのためには、お前が警察を率いなければならないのだ」

「でも・・・」

碧子が何かを言おうとした。しかし、正義がそれを遮る。

私の時代はもう終わった。これからは、お前達のような若い者達の時代だ」

「総監……」

気持ちを整理できていない碧子に、正義が手を差し伸べる。十数年前、握手を交わしたあの手だ。年月とともに老けた、正しき志の手だ。

この手があったから、碧子は警察を目指す事になった。静かに燃える彼に憧れ、猛勉強した日々が思い出される。

「警察を……頼むぞ」

新たな時代の、新たな警察。その指揮を執る役目は、今井碧子に託された。

「……はい！」

翌日、握手を交わす二人の姿が、新聞の一面を飾った。

この後、達也は総監補佐に任命され、未成年刑事の一般化を目指す機関、特殊捜査官育成機関を設立。新たな物語を紡ぐ事となる。

この物語はフィクションです。

終章（後書き）

汚れなき邪悪な心、いかがだったでしょうか。交差する天才達の意志、愛する者を失った遺族の恨み・・・それらがこの結末を導きました。悪とは何か・・・それは人の負の感情そのものであると言わざるを得ないでしょう。この小説を通し、神崎祐を気に入ってくれた方々、またそうでない方もこれからよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9964a/>

汚れなき邪悪な心

2010年10月8日11時57分発行